

THE
JAPAN FOUNDATION
2011/2012

國際交流基金 2011年度 年報

国際交流基金

ジャパンファウンデーションとは

世界の全地域において、総合的に国際文化交流事業を実施する組織として、1972年10月に特殊法人として設立され、2003年10月に外務省所管の独立行政法人となりました。現在、本部と京都支部、ふたつの附属機関(日本語国際センター、関西国際センター)、および海外21カ国に開設された22の海外拠点を中心に、外部団体と連携しつつ、文化芸術交流、海外における日本語教育、日本研究・知的交流を3本の柱として活動しています。政府出資金(780億円)を財政的基盤とし、この出資金の運用益、政府からの運営費交付金および民間からの寄附金などにより運営しています。役職員数は230名です。

沿革

1972年 国際交流基金(The Japan Foundation) 設立

1989年 日本語国際センター(埼玉県) 設置

1991年 日米センター(Center for Global Partnership) 設置

1997年 関西国際センター(大阪府) 設置

2003年 独立行政法人国際交流基金となる

2006年 日中交流センター設置

国際交流基金の設立の目的は2002年(平成14年)に定められた以下の法律に則ったものです。

独立行政法人国際交流基金法 第3条

「独立行政法人国際交流基金は、国際文化交流事業を総合的かつ効率的に行うことにより、我が国に対する諸外国の理解を深め、国際相互理解を増進し、及び文化その他の分野において世界に貢献し、もって良好な国際環境の整備並びに我が国の調和ある対外関係の維持及び発展に寄与することを目的とする」

国際交流基金の活動の3本の柱

文化芸術交流

芸術や暮らしのなかで生まれた日本の価値観と世界の価値観が触れ合う機会をつくりだす

言語の違いを超えた感動は、日本への興味と共感を生み、理解を促す源泉となります。国際交流基金は、そのような源泉を生み出す場の提供をめざし、美術、音楽、演劇、文学、映画などの芸術から、食、ファッション等の生活文化にいたるまで、日本の文化芸術を紹介し、文化芸術分野のグローバルな交流をプロデュースし、各分野のネットワークづくりを支援しています。

海外における日本語教育

日本語を理解する人を増やすこと

それは世界に日本の理解者を増やしていくこと

海外の人たちに日本語を知ってもらうことは、日本への親しみや理解を世界に広げていくことにつながります。国際交流基金は日本語教育が世界で活発に行われるよう、全世界規模での日本語能力試験(JLPT)の実施や教材開発、海外日本語講座の展開、日本語教育の専門家の海外への派遣、海外で教える教師の国内研修など、さまざまな側面から日本語教育を支援しています。

日本研究・知的交流

日本への深い理解と世界の「知」への関心

ふたつが交錯するところに

世界共通の課題を解く鍵がある

海外での日本研究を支援すること、遠い国の社会や文化への理解を日本のなかで広げていくことは、相互理解を深め、心をひとつにして共通の課題の解決に向かっていくことにつながります。国際交流基金は深い日本理解と人的ネットワークの形成を促進するため、海外の日本研究者を支援し、また国際的に著名な学者を日本に招くなど、学術や研究を通じて国際交流を積極的に推し進めています。

2011年度 国際交流基金主要事業カレンダー

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
<ul style="list-style-type: none">●新藤兼人レトロスペクティブ巡回上映<small>〔米国〕</small> ●第37回ブエノスアイレス国際図書館展<small>〔アルゼンチン〕</small> ●第26回サウジアラビア伝統と文化の国民祭典(ジャナドリヤ祭)<small>〔サウジアラビア〕</small> →P.13 ●ロボット文化に関するレクチャー・デモンストレーション<small>〔ドイツ、クウェート、ポーランド〕</small>	<ul style="list-style-type: none">●「昭和40年会：We are Boys!」展<small>〔ドイツ、ウクライナ〕</small> ●「新次元　マンガ表現の現在」展<small>〔ベトナム、フィリピン〕</small> ●東欧巡回日本映画祭<small>〔ラトビア、スロベニア、ルーマニア、ロシア、ギリシャ、クロアチア、マケドニア、ポーランド、ブルガリア、ハンガリー、セルビア、モンテネグロ、スロバキア、チェコ、リトアニア、ボスニア・ヘルツェゴビナ〕</small> <p>●第54回ヴェネチア・ビエンナーレ日本館「東茅：てれこスーブ」<small>〔イタリア〕</small> → P.4</p> <ul style="list-style-type: none">●平泉写真展「平泉―仏国土(浄土)を現す建築・庭園」<small>〔フランス〕</small> ●第17回ソウル国際ブックフェア<small>〔韓国〕</small>	<ul style="list-style-type: none">●第52 回外国人による日本語弁論大会<small>〔日本〕</small> → P.5、P.19 ●専門日本語研修(文化・学術専門家) 2ヵ月コース<small>〔日本〕</small> ●日本語学習者訪日研修(高校生)<small>〔日本〕</small>	<ul style="list-style-type: none">●「田中敦子―アート・オブ・コネクティング」展<small>〔英国、スペイン、日本〕</small> → P.12 ●大連ふれあいの場 開設<small>〔中国〕</small> → P.16	<ul style="list-style-type: none">●日独交流150周年記念 北斎展<small>〔ドイツ〕</small> → P.12、P.35 ●中央アジア現代邦楽公演 ZATAIVSHIYSYA DRAGON (眠った竜)<small>〔ウズベキスタン、トルクメニスタン〕</small> ●浮世絵版画レクチャー・ワークショップ<small>〔カンボジア、ミャンマー、タイ〕</small> ●心連心：中国高校生長期招へい事業 第六期生 来日<small>〔日本〕</small> → P.16	<ul style="list-style-type: none">●海外日本語教師長期研修<small>〔日本〕</small> → P.22 ●日本語学習者訪日研修(各国成績優秀者)<small>〔日本〕</small> ●中国大学日本語教師研修<small>〔日本〕</small> ●専門日本語研修(文化・学術専門家)6ヵ月コース<small>〔日本〕</small> ●専門日本語研修(外交官・公務員)<small>〔日本〕</small> ●国内大学連携大学生訪日研修(秋期)<small>〔日本〕</small>	<ul style="list-style-type: none">●JF 講座開始記念事業(書道家派遣)<small>〔ウクライナ、カザフスタン〕</small> →P.5 ●海外日本語教師上級研修<small>〔日本〕</small>	<ul style="list-style-type: none">●ベトナム・ロシア教育関係者グループ招へい<small>〔日本〕</small> ●米国・カナダ教育関係者グループ招へい<small>〔日本〕</small> ●日本語学習者訪日研修(大学生・秋期)<small>〔日本〕</small>	<ul style="list-style-type: none">●Omnilogue: Alternating Currents 展<small>〔オーストラリア、インド〕</small> ●琉球-沖縄芸能 大洋州公演―CHIMU―<small>〔ニュージーランド、フィジー、トンガ〕</small> ●中米・カリブ諸国邦楽公演―OYAMA x NITTA with Special Members<small>〔コスタリカ、トリニダード・トバゴ、ドミニカ共和国〕</small> ●クウェート・ヨルダン和太鼓公演<small>〔クウェート、ヨルダン〕</small> → P.5 ●江戸写し絵東欧公演―蘇る江戸の幻想<small>〔ポーランド、ハンガリー、ルーマニア、ブルガリア〕</small> ●活弁・演奏付き無声映画欧州巡回上映会<small>〔イタリア、フランス、ドイツ〕</small> → P.14 ●第13回国際知的図書館展"non/fiction"<small>〔ロシア〕</small> → P.5 ●アゼルバイジャン国立美術館所蔵品調査<small>〔アゼルバイジャン〕</small> → P.15 ●琉球料理レクチャー・デモンストレーション<small>〔ドイツ、フランス、スウェーデン〕</small> → P.5	<ul style="list-style-type: none">●杉戸洋展：paintings and sketches<small>〔シンガポール〕</small> ●日本画修復専門家招へい研修<small>〔日本〕</small> → P.15	<ul style="list-style-type: none">●日印文化交流フェスティバル「India-Japan: Passage to the Next Generation」<small>〔インド〕</small> → P.34-35 ●和風ワークショップ<small>〔インド〕</small> → P.5 ●能楽公演<small>〔アルジェリア、フランス〕</small>	<ul style="list-style-type: none">●ロサンゼルス日本文化センター「JF Nihongo」開講<small>〔米国〕</small> → P.19、P.38 ●日本語学習者訪日研修(李秀賢氏記念韓国青少年招へい事業)<small>〔日本〕</small> ●中国中等学校日本語教師研修<small>〔日本〕</small> ●海外日本語教師短期研修(冬期)<small>〔日本〕</small> ●日本語学習者訪日研修(大学生・冬期)<small>〔日本〕</small>	<ul style="list-style-type: none">●全国JET日本語教授法研修<small>〔日本〕</small> ●国内大学連携大学生訪日研修(冬期)<small>〔日本〕</small> ●「国際交流基金日本語教育紀要」第8号発行 ●日本語専門家活動報告会<small>〔日本〕</small> ●「JF にほんごネットワーク(通称：さくらネットワーク)」42カ国2地域118機関に拡大 → P.20 ●「日本語能力試験 公式問題集」発行 → P.21 ●「アニメ・マンガの日本語」スペイン語版・中国語版・フランス語版 サイト完成 → P.23 ●「みんなの「Can-do」サイト」リニューアル → P.23
		<ul style="list-style-type: none">●日米次世代パブリック・インテレクチュアル・ネットワークプログラム<small>〔日本〕</small> ●シンポジウム「日米パートナーシップの深化：変貌する世界に於ける教育と文化の絆」<small>〔米国〕</small>								<ul style="list-style-type: none">●カルチュラル・リーダーシップ・ミーティング「これからの文化セクターにおけるリーダーシップとは」<small>〔日本〕</small> ●ラウンドテーブルディスカッション「災害復興期の都市計画とコミュニティ・デザイン」<small>〔インドネシア〕</small> → P.36 ●中東次世代リーダー招へい<small>〔日本〕</small> → P.30		
		<ul style="list-style-type: none">●東日本大震災の被災地とアメリカをつなぐ「元気メール」プロジェクト<small>〔日本〕</small> → P.7									<ul style="list-style-type: none">●日本・韓国・欧州多文化共生都市国際シンポジウム<small>〔日本〕</small> → P.27 ●日米次世代パブリック・インテレクチュアル・ネットワーク・プログラム(ワシントン)<small>〔米国〕</small>	
			<ul style="list-style-type: none">●日欧「絆」プロジェクト ～コミュニティが育む連帯と多様性～<small>〔日本〕</small> → P.27 ●日独シンポジウム 「東日本大震災と新旧メディアの役割」<small>〔ドイツ〕</small> → P.27 ●日米草の根交流コーディネーター派遣プログラム<small>〔米国〕</small> ●日米青年指導者交流プログラム・第23回訪米プログラム<small>〔米国〕</small>								<ul style="list-style-type: none">●日本・韓国・欧州多文化共生都市国際シンポジウム<small>〔日本〕</small> → P.27 ●日米次世代パブリック・インテレクチュアル・ネットワーク・プログラム(ワシントン)<small>〔米国〕</small>	
				<ul style="list-style-type: none">●国際シンポジウム「社会イノベーションのためのエコシステムをデザインする ～アジアからのメッセージ」<small>〔日本〕</small> ●日本近世文学学会・秋季大会<small>〔韓国〕</small> → P.29 ●2011年アルザス日欧知的交流事業 日本研究セミナー：大正 / 戦前<small>〔フランス〕</small> → P.28 ●第7回日中韓文化交流フォーラム<small>〔韓国〕</small> ●日米青年指導者交流プログラム・第28回国代表団訪日プログラム<small>〔日本〕</small> ●国際会議「台頭する中国とインド：日本にとって挑戦か好機か」<small>〔日本〕</small>								
				<ul style="list-style-type: none">●ヨーロッパ日本研究協会第13回国際大会<small>〔エストニア〕</small> → P.29 ●米国際関係論専攻大学院生招へい<small>〔日本〕</small> ●日本・韓国・欧州多文化共生都市国際シンポジウム<small>〔韓国〕</small> → P.36 ●安倍フェローシップ コロキアム「東アジアにおける地域主義と日米関係」<small>〔日本〕</small>								
							<ul style="list-style-type: none">●アジア・リーダーシップ・フェロー・プログラム(ALFP)公開シンポジウム 「対立と災害を超えて：アジアにおける市民社会の役割」<small>〔日本〕</small> → P.27 ●東南アジア若手イスラム知識人招へい<small>〔日本〕</small>					
										<ul style="list-style-type: none">●トルコの文化交流機関、ユヌス・エムレ・インスティテュートと協力協定を締結		
											<ul style="list-style-type: none">●地球市民賞授賞式<small>〔日本〕</small> → P.7、P.8	

国際交流基金設立40周年を迎えて



2012年(平成24年)10月2日は国際交流基金の40歳の誕生日です。1972年(昭和47年)に発足して以来、当基金の活動とその役割に対し、日本の内外で一定の評価をいただいていることは、国際文化交流に関わる皆様、諸先輩方のご支援とご尽力の賜物であり、改めて深く感謝申し上げます。設立40周年の節目を迎え、私はこの伝統ある組織の理事長として、新たな展望とともに引き続き「挑戦」を続けていきたいと考えています。

経済力において、日本がまだ世界の上位に位置していることは事実ですが、世界のなかでの存在感は相対的に低下しつつあります。しかし、東日本大震災の際に改

めて高い評価を得た日本人の生きざまや、日本の文化力には優れたものがあります。日本の良さ、魅力をより多くの海外の方に知っていただき、日本に対する理解を深めていくことが、これからの日本にとって重要であると考えております。東日本大震災の後、被災地の皆さまの復興へのご努力をさまざまな形で世界に紹介いたしました。今後も基金の活動をより活発に展開することにより、世界とともに生きる、価値ある日本をアピールして参りたいと存じます。

同時に、日本を知っていただくだけでなく、諸外国と日本とのさまざまな結びつき、絆をさらに深めていくことが大切です。そのためには、海外の方々とともに考え、取り組んで行く、いわば文化を共同で創造していく事業や、互いに触れ合い、知り合う、双方向の交流事業、さらには相手国の文化の振興に関与していく事業を実施していくことも重要と考えています。

もちろん、わが国の財政事情は厳しさを増し、行財政改革の取り組みが真剣に行われているなか、当基金においても、少ないリソースであっても、より効率的な事業展開を行うことは不可欠です。政府機関や国内外の民間団体等との連携・協力も従来に加えて一層進め、オール・ジャパンでの取組みを進めていきます。

世界はいま、厳しいチャレンジに直面しています。日本の国民の皆さまの幅広いご理解を得て、国際交流基金は、今後も皆さまとともに、前へ進んで参ります。

2012年10月

国際交流基金
理事長 安藤 裕康

国際交流基金 2011年度 年報
Contents

-
- 00 2011年度 国際交流基金主要事業カレンダー
- 02 理事長からのごあいさつ
- 04 国際交流基金2011年度を振り返る
- 06 国際交流基金の東日本大震災復興に関する取り組み
- 08 国際交流基金賞／地球市民賞
-
- 09 **文化芸術交流**
- 10 文化芸術交流事業の紹介
- 12 2011年度 主な事業
-
- 17 **海外における日本語教育**
- 18 海外における日本語教育事業の紹介
- 20 2011年度 主な事業
-
- 25 **日本研究・知的交流**
- 26 日本研究・知的交流事業の紹介
- 28 2011年度 主な事業
-
- 32 **情報提供／国内連携**
- 34 国・地域別の取り組みと海外拠点の活動
-
- 41 **資料**
- 42 文化芸術交流事業概観
- 44 海外における日本語教育事業概観
- 46 日本研究・知的交流事業概観
- 48 民間からの資金協力
- 50 財務諸表
- 53 諮問委員会等
- 54 国際交流基金の海外拠点
- 56 国内連絡先一覧／組織図
- 57 国際交流基金のウェブサイト

国際交流基金2011年度を振り返る

国際交流基金は2011年度も、日本の芸術、舞台、出版や映像、生活文化を海外で紹介し、日本語を通して日本に親しみを感じてもらうための事業や、知的交流や日本を研究する専門家同士の交流など、多くの事業を展開しました。ここでは、それらの事業の一端を写真で紹介します。



世界の美術の祭典に参加する

撮影：Ufer! ©Tabaimo/Coutesy of Gallery Koyanagi and James Cohan Gallery

国際交流基金はヴェネチアなどの国際美術展や建築展の日本側主催者を務めている。第54回ヴェネチア・ビエンナーレ美術展日本館では、東芋(たばいも)の作品を紹介した



「日本の技術」を「日本の文化」の視点で

カナダ文明博物館で開催された日本特別展「JAPAN: Tradition. Innovation」のオープニングで。日本の最先端技術やデザインが江戸時代からの伝統文化をルーツにしていることなどが紹介された展覧会だった 写真提供：在カナダ日本国大使館



街ぐるみの交流で日本の文化を肌身で感じる

地域の秋祭りに参加する関西国際センターの研修生。近隣自治体や国際交流団体の協力を得て、日本の文化・社会への理解を深めるために各種プログラムを実施している



伝統楽器のハイブリッドな演奏スタイルを中東へ

クウェートとヨルダンの2カ国で行った、若手太鼓奏者の上田秀一郎、バイオリンの須磨和声、サクソフォンの田村真寛の3人のユニットの音楽公演。アラブの打楽器タブラに通じる、和太鼓の迫りに会場は熱気に包まれた



文化とともに学ぶ日本語

ロシア、ウクライナ、カザフスタンで行われた日本語講座。日本人書家によるデモンストレーションを通して、日本の文字の美しさを学び、日本語と日本文化に関する理解を深めた



地方料理の魅力を紹介

パリ、アウグスブルグ(ドイツ)、ストックホルムの3都市で、琉球料理の伝承者山本彩香氏がデモンストレーション。気候の異なる地の料理に高い関心が寄せられた



アジアの未来を語り合う

日中韓3カ国の若手知識人が参加する「日中韓次世代リーダーフォーラム」の10周年を記念して、今後の日中韓関係を議論する特別フォーラムを開催した



日本の文芸を世界で紹介するキーパーソン

山岡荘八著『徳川家康』25・26巻の中国語版『徳川家康 13』を翻訳した岳遠坤氏が、第18回野間文芸翻訳賞を受賞。日本文学の研究者として期待されている



日本語学習者が研鑽の成果を発表

第52回を迎えた外国人による日本語弁論大会。予選を勝ち抜いた12名が日本での生活などを通して考えたこと、感じたことを、ユーモアや感動を交えて披露した



海外の文芸ファンと交流

ロシア・モスクワの図書館「non/fiction」展に、世界的人気を誇る『リング』の著者、鈴木光司氏を派遣。講演を行い、現地のメディアからのインタビューに応えた



海外の人と日本の美術家が「共につくる」

インド・ビハール州の農村部にあるニランジャナ・スクールを舞台に繰り広げられた芸術祭「Wall Art Festival 2012」。日本とインドの気鋭の美術家が村人や子ども達にアートの力を伝えた。遠藤一郎×浅井裕介による「未来への象」撮影：三村健二



民俗芸能を通して「東北」の魅力を紹介

東北は民俗芸能の宝庫。湧水神楽（岩手県遠野市）、黒森神楽（岩手県宮古市）、白澤鹿子踊（岩手県上閉伊郡大槌町）の3つのグループと、和太鼓ほかジャンルを超えた音楽家達からなる鬼太鼓座& Musiciansによる東北の民俗芸能を紹介する公演を、米国、フランス、中国の3カ国8都市で展開した。写真上は白澤鹿子踊（中国・広州）、下左は黒森神楽（フランス・パリのリセ・インターナショナル・サンジェルマン・アン・レー校）、下右は湧水神楽（アメリカ・ロサンゼルス）の各公演

国際交流基金の東日本大震災復興に関する取り組み

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、東北地方を中心とする広い範囲に甚大な被害をもたらしました。あれから1年以上の月日が経っても、被災地では未だに行方不明者の捜索が続き、仮設住宅での暮らしを余儀なくされている人が大勢います。あらためて、亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災された方々に心からお見舞いを申し上げます。

国際交流基金は、国際社会へ向かって、東北地方が本来もつ豊穡さ、コミュニティにおける人間の絆の強さといった魅力を紹介するとともに、世界中から日本に寄せられた

温かい支援に対する日本人の感謝の気持ちを表し、あわせて日本の復興への決意を伝えるために、世界各地で舞台公演、展覧会、映画・ドキュメンタリーの上映会などの文化事業、これまでに培ってきた人的ネットワークや災害復興・防災に関する事業の実績とノウハウを生かした講演会やシンポジウム、対話事業などを行いました。震災を契機に、海外では日本人の精神や日本社会を支える文化の力が注目されています。国際交流基金はこれからも日本の魅力を発信し、被災経験を海外の人達と共有し、被災地をはじめ日本と海外の交流を促進することにより、復興に貢献していきます。



地球市民賞・理事長特別賞を3団体に

国際文化交流のモデルとなる活動を行う団体を表彰する「地球市民賞」選考にあたり、国際文化交流を通じた復興支援を行う3団体、陸前高田市国際交流協会(岩手県)、国際交流協会ともだちin名取(宮城県)、ザ・ピープル(福島県)に理事長特別賞が贈呈された



米国の子ども達の「元気メール」を携えて

米国の若手ジャーナリスト達が、全米の小学生達から被災地の子ども達に向けてのメッセージを携えて来日。被災地に応援のメッセージ届けるとともに、現地を実際に見て、災害に遭った人達の生の声を聞く機会もあった 撮影：相川健一



震災、東北に関する映画、ドキュメンタリー上映

あるがままの東北と、災害を克服する日本人が描いた映像作品を、86カ国138都市で上映。「映画を観て日本に行きたくなった」など多くの反響があった



災害に立ち向かう建築家の提案

震災後、建築家達はいち早く現場に入り災害に向き合った。建築家達の復旧活動のあり方と復興にむけての提案を紹介する展覧会をパリ日本文化会館で行った



日米の架け橋となる高校生達

東北でJET外国語指導助手として活躍中に震災の犠牲となった2名のアメリカ人青年を讃え、米国の高校生が来日。東北訪問や関西国際センターでの研修を行った



写真展「東北一風土・人・暮らし」

農村の暮らし、民俗儀礼や祭り、自然など、異なる視点から描いた、東北にゆかりのある写真家10組の作品による展覧会を北京で開催。2千人を超える来場者が訪れた



世界各地で追悼の祈り

東日本大震災の犠牲者を悼むインド・ニューデリーの若者。震災から丸1年目にあたる2012年3月11日には、世界各地で追悼行事が多数行われた 撮影：aki



鎮魂の花火を世界の人達と

2011年8月、10カ所の被災地で、犠牲者の鎮魂と復興への願いを込め一斉に花火を打ち上げる「LIGHT UP NIPPON」が開催された。復興に取り組む日本の若者のリアルな一面を海外へ伝えることを目的に、国際交流基金はイベント実現までを追ったドキュメンタリーを制作し、14カ国16都市で、22回の上映会を開催した 撮影：相川健一

国際交流基金賞

国際交流基金では、1973年以來毎年、学術、芸術、その他の文化活動を通じて、国際相互理解の増進や国際友好親善の促進に特に顕著な貢献があり、引き続き活躍が期待される個人、団体に「国際交流基金賞」を授賞し、国際文化交流の発展を奨励しています。本年は東日本大震災が発生したことから、本賞授賞式において受賞者らによるシンポジウム「日本的風土の再構築」を開催しました。

2011年度 受賞者

文化芸術交流部門

撮影：新井卓



タンブッコパーカッションアンサンブル
TAMBUCO Percussion Ensemble

メキシコ

大太鼓や締太鼓など日本の楽器を多用し、メキシコのみならず世界各国において質の高い日本の現代音楽および日本人作曲家による作品を披露している。また、箏、尺八、マリンバ、バイオリンなどの著名な日本人演奏家とのコラボレーションも積極的に行い、日本文化の理解および促進に大きな役割を果たしている。

受賞記念コンサート
2011年10月7日、トッパンホールにて
協力：トッパンホール

日本語部門

撮影：相川健一



カイロ大学文学部日本語日文学科

エジプト

中東・アフリカ地域で最初に発足した日本語・日本研究分野の重要拠点として、長年にわたり日本語・日本文化研究者の育成および日本語の普及を行っている。文学から政治に至るまで、同学科の卒業生により数多くの日本関連書籍・翻訳書が出版され、アラビア語圏における円滑かつ効果的な日本文化理解に大きく貢献している。

カラム・ハリール学科長による受賞記念講演会
「エジプトの日本語教育とカイロ大学の歩み」
2011年10月13日、国際交流基金日本語国際センターにて

日本研究・知的交流部門



オギュスタン・ベルク
Augustin Berque

フランス/国立社会科学高等研究院退任教授

日本各地の文化や風土に造詣が深く、独自の風土論を確立したフランスの著名な日本研究者。和辻哲郎『風土』に出会ったことを契機に、単なる自然環境ではない「風土」に関する画期的な研究が続いている。地理学、哲学、人類学、そして日本研究の分野において多大な貢献をしてきた。

受賞記念講演会
「日本風土の教え：蝦夷論から進化論へ」
2011年10月12日、国際交流基金 JFICホール「さくら」にて

地球市民賞

地球市民賞は、豊かで活力のある社会を築くうえで、多くの人々が国際文化交流のモデルとして参考になる活動を、主体的発意で行っている市民団体を顕彰するもので、1985年より毎年贈呈しています。2011年度は、国際文化交流を通じた東日本大震災復興支援を行っている国際交流団体に対し「理事長特別賞」を贈呈しました。(P.7に関連情報)

2011年度 受賞者

かものはしプロジェクト 東京都渋谷区



カンボジアの児童教育や技術研修、人身売買阻止のための現地警察研修、コミュニティ・ビジネスによる自立支援などの活動を実践。活動資金を賄うためにIT事業の受託で起業した点もアントレプレナー・モデルとして評価されている。

ブラジル友の会 岐阜県美濃加茂市



日本在住のブラジル人が直面する各種の困難や課題解決のための自助組織として設立された。日本での生活にまつわる相談や情報提供、地域の人材育成、就労支援、起業家支援なども積極的に展開し、美濃加茂市から定住外国人支援センターの運営を受託するまでに発展した。

鳥の劇場 鳥取県鳥取市



演劇がもつ力や、地域社会における演劇上演、劇場の新しい可能性を引き出すべく、国際共同制作を含めた現代劇の創作・上演、ワークショップやレクチャーなどを実施。また、演劇に限定しない多様な芸術活動で地域のアート・センターとしての役割も果たす。

文化芸術交流

Arts and Cultural Exchange

美術、音楽、演劇、文学、映画などの芸術から、食、ファッション等の生活文化にいたるまで、日本の文化芸術を紹介し、文化芸術分野のグローバルな交流をプロデュースし、ネットワークづくりを支援しています。

文化芸術交流

Arts and Cultural Exchange

日本の文化芸術を世界に広める

海外の人びとが日本の文化芸術に触れることで、日本人が育んできた意識や価値観を理解し、感じる機会を創出する事業を展開しています。造形美術、舞台芸術、映像・文芸、生活文化という4つの領域において、古典芸術や伝統芸能、ポップカルチャーやサブカルチャー、現代芸術などを幅広く展示、公演、出版、映画上映などの形で紹介します。日本の文化を多方面に発信することで、芸術による国際交流の輪を広げています。

情報を提供し、ネットワークを構築する

芸術や文化を通じた国際交流を効果的に進めるためには、互いの国の文化芸術に関する情報の共有や、担い手同士のネットワークの構築が不可欠です。国際交流基金は、舞台芸術、文学、映画などの分野において、日本の最新情報を収集し、ウェブサイトやニュースレターにより海外へ発信しています。また、芸術分野における国際展や見本市など、人や情報が集まる場の創出も行っています。

造形美術

国内外の美術館・博物館などの協力を得て、日本の美術・文化を海外に紹介する大型展覧会や、現代美術、写真、工芸、建築、デザイン、日本人形などのコンパクトな巡回展を世界中で実施しています。国単位での参加が求められる「ヴェネチア・ビエンナーレ」などの国際展での日本代表作家作品の展示、海外で実施される日本美術の展覧会への助成、作家や美術関係者等の人物交流事業など、交流の推進と情報発信に取り組んでいます。

舞台芸術

歌舞伎、文楽、能・狂言、日本舞踊といった古典芸能から邦楽や民謡、またジャズ、クラシック、現代舞踊、現代演劇など、さまざまな日本の舞台芸術を紹介するとともに、国際共同制作も手がけています。また海外公演を行う団体・アーティストへの支援・助成、日本の舞台芸術情報ウェブサイト「performingarts.jp」の運営や、「国際舞台芸術ミーティングin横浜」の開催などの情報発信・人物交流に取り組んでいます。

生活文化

茶道、生け花、武道、食、大道芸など日本人が生活のなかで生み出した文化を、講演やデモンストレーション、ワークショップの形で海外の人びとに紹介し、体験してもらう機会をつくっています。その他、日本の文化を支える優れた知識や技術をもった専門家を海外へ派遣し、文化財保存・修復、スポーツや音楽の実技指導を行うなど、その国の文化振興に貢献しています。

映像・文芸

日本のテレビ番組の海外放映、海外で制作される日本に関するテレビ番組・映画への助成、日本映画祭の開催、国際映画祭における日本映画上映へのサポートなど、映像を通じた日本理解の機会をつくります。また、海外の出版社や翻訳者に向けて日本の書籍を紹介する季刊誌『Japanese Book News』を刊行。翻訳・出版への助成や、海外での図書展への参加などを通して、日本文学が海外に広まるための土壌づくりを行っています。

日中交流センター

日本と中国の次代を担う若い世代の交流を促進するため2006年に設立。中国の高校生を約11カ月間日本に招へいし、日本人と同じ学校・家庭生活を送る「中国高校生長期招へい事業」、中国国内で日本の雑誌、漫画、音楽などの最新情報を紹介する「ふれあいの場」、日中両国の若者がブログや掲示板などを通じて参加・交流することのできる「心連心ウェブサイト」の3つの事業を実施しています。



1



2



3



4



5



6



7

1. フランス・パリのパレ・デ・コングレで開催された「東北民俗芸能と鬼太鼓座&Musicians」公演の黒森神楽の舞台／2. 「東北民俗芸能と鬼太鼓座&Musicians」公演は米国、フランス、中国の計8都市を巡回した。各公演に先立ち、各地の子ども達を対象に竹楽器づくりのワークショップを行い、子ども達も共演者として舞台に参加した。写真はロサンゼルスでのワークショップ 撮影：岡田信行／3. 中国公演に登場した白澤獅子踊／4. 米国公演（国連総会議場における公演を含む）に出演した湧水神楽／5. バリ日本文化会館での建築展「3.11—東日本大震災の直後、建築家はどうか対応したか」。避難所での緊急対応から本格的復興計画まで、震災直後から1年間に建築家たちが取り組んだ50以上のプロジェクトを紹介した／6. 中国で行われた学習院大学教授の赤坂憲雄氏による「震災と東北、そして文化」講演会／7. 世界86カ国138都市で、震災にまつわるドキュメンタリー、東北を舞台にした劇映画、震災や自然災害をモチーフとした劇映画などのDVD上映会を行った。写真はニューヨーク・ジャパン・ソサエティでの上映会のようす 撮影：Jonathan Slaff

日本の美術・文化を海外に紹介する 大型展覧会を世界各地で実施

■北斎展

ドイツ・ベルリンで日独交流150周年を記念し、葛飾北斎の展覧会を、墨田区、日本経済新聞社との共催で開催しました。「富嶽三十六景 神奈川沖浪裏」などの名作で知られる北斎の生誕の地である墨田区の所蔵コレクションや、「北斎漫画」シリーズなどの版本、肉筆画、版画、摺物に、ベルリン東洋美術館のコレクション等を加えた約440点の作品で構成し、印象派にも影響を与えた北斎の約70年におよぶ創作活動の全容を紹介しました。ドイツ連邦大統領の臨席のもとで行なわれたオープニングは、出席者の行列が美術館の外にまで続くほどの盛況振りでした。会期中の総観客数は9万人を超え、好評のため、会期が当初の予定より1週間延長されるなど、欧州における北斎人気が増えつつあります。

会期中には関連企画として、監修者、永田生慈氏の講演会やアダチ伝統木版画技術保存財団の版画刷師実演も行なわれ、数多くの観客がその技術に熱心に見入っていました。[Martin-Gropius-Bau (ベルリン) 2011年8月26日～10月31日]

■田中敦子 — アート・オブ・コネクティング

戦後日本の前衛美術グループ「具体」を代表する女性アーティストとして、国内にとどまらず海外でも注目を集めている田中敦子(1932-2005)の欧州初ともいえる本格的な個展を開催しました。

約200個の電球が点滅する代表作「電気服」(1956)をはじめ、絵画やコラージュ、パフォーマンス記録映像など50年にわたる制作活動のなかから厳選された約100点の作品が紹介されました。

英国・バーミンガムを皮切りに、展覧会はスペイン・カステジョン、東京へと巡回し、それぞれの地の観客に大き

な関心をもって迎えられとともに、各地の美術関係者から高い評価を得ました。また、すべての会場で子ども達を中心とした教育プログラムや田中敦子とゆかりのある作家による講演プログラムなどが展開され、近年関心が高まる日本の戦後美術への理解を促し、そのなかでも際立った存在であった田中敦子の先鋭性を改めて照射するまたとない機会となりました。

[アイコン・ギャラリー(英国・バーミンガム) 2011年7月27日～9月11日、カステジョン現代美術センター(スペイン・バレンシア州) 2011年10月7日～12月31日、東京都現代美術館 2012年2月4日～5月6日]

■呼吸する環礁(アートル) — モルディブ・日本現代美術展

青い海に囲まれたモルディブの美しい珊瑚礁の島々は、世界の人びとを魅了して止みません。しかし、近年の地球温暖化等の影響による海面上昇により、島嶼は水没の危機に直面しています。

この展覧会は、環境とアートをテーマに企画が立ち上がったもので、日本とモルディブのアーティスト8組が、現地に滞在しての制作や、地元の人びととの交流を通してモルディブの現状に向き合い、各自が個性的なアプローチによってテーマに相応しい作品を展示しました。環境問題に対する即効性をアートに求めるものではありませんが、より多くの人びとに地球環境について改めて考えていただくことを願って、開催されたものです。

展覧会は、モルディブの首都マレの国立美術館および隣接する公園を会場に実施され、その後内容を一部変更して、東京でも開催されました。

[モルディブ国立美術館(モルディブ・マレ) 2012年3月20日～4月19日、スパイラルガーデン(東京) 2012年5月24日～6月3日]



[左]「北斎展」会場風景

[中] スペインでの「田中敦子展」教育プログラム実施風景

撮影: Stuart Whipps

[右] モルディブ「モルディブ・日本現代美術展」展示風景写真

撮影: Kenji Morita



音楽や演劇の力で 日本と世界をつなぐ

■心を伝える民謡 大和×沖縄民謡 南米公演

東日本大震災では、民謡の宝庫である東北地方が甚大な被害を受けました。被災地にエールを送ろうと、日本の民謡界を代表する奏者たちによる公演を、2011年9月14日から10月2日にかけて、世界有数の音楽と歌の宝庫である南米4カ国(チリ、アルゼンチン、ウルグアイ、ブラジル)で行いました。ブラジル以外の3カ国では、各国の代表的ミュージシャンも公演趣旨に賛同して参加。なかでもチリでは、歌による社会運動「ヌエバカンシオン」の流れを汲む人気ミュージシャン5名とのジョイントライブを実施しました。双方の歌の魅力を伝えながら互いの歌でセッションする夢のような公演で、会場には約1,200人が集まりました。チリは控えめな国民性で知られていますが、観客は立ち上がって踊り出すほどの盛り上がりでした。チリも2010年の大地震から復興の途上にあります。震災に苦しむ両国が音楽の力でひとつになる様は、まさに国際文化交流を体現する光景でした。

■ひとり人形劇の新作をパレスチナで世界初演

2011年10月10日から20日、ヨルダン川西岸、パレスチナ自治区5都市(ラマッラ、ジェニン、ヘブロン、ナブルス、東エルサレム)で、ひとり人形劇俳優・たいらじょうの人形劇「ふしぎな森のトゥウインクル!」の世界初演となる公演を行いました。

この作品は、パレスチナ巡回公演のために創作された「言葉のない台詞劇」で、台詞はすべて擬音語です。妖精たちが棲む“ふしぎな森”を舞台に、ひとつの花をめぐり、価値観の違いや論争を乗り越え、平和的な癒しを得るファ

ンタジー作品です。ヘブロンの難民キャンプの親子をはじめ、子どもや学生に、ワークショップや交流プログラムを通して、人形制作・操演という日本の熟練の技を直に伝え、文化を通じた平和構築を試みる事業でした。

周辺国との往来が厳しく制限され、今なお紛争の痕も残るパレスチナで、市民・青少年に対する教育文化活動として企画されたこの公演ですが、会場では、たくさんの子どもの希望に満ちた元気な声援が聞かれました。

■サウジアラビアの国民祭典で総合的に日本を紹介

サウジアラビアでは宗教的理由により文化活動が大きく制約されているなかで、毎年1回開催される「ジャナドリヤ祭(正式名称:第26回サウジアラビア伝統と文化の国民祭典)」は「唯一無二の文化行事」として国民の高い関心を集めています。2011年4月13日から29日にかけて開催された第26回ジャナドリヤ祭では日本がゲスト国となり、専用パビリオンである「日本館」で官民一体となった日本紹介事業が行われました。国際交流基金では、日本館内での武具の展示や、茶道、華道、日本画のデモンストレーションを、屋外ステージでは石見神楽公演、鬼太鼓座や梅津和時トリオら“Music & Rhythms”による音楽公演、古武道、空手のデモンストレーションなどの総合的な日本文化紹介事業を実施しました。

17日間の会期中、約18万人が日本館を訪れ、12万人が屋外ステージ公演を鑑賞しました。東日本大震災直後の困難を乗り越えて日本が同祭に参加し、大きな成功を収めたことに対して、賞賛と感謝の辞が寄せられました。



[左] 心を伝える民謡 大和×沖縄民謡・アルゼンチンでの公演
[中] ひとり人形劇俳優・たいらじょうとパレスチナの子供たち
[右] ジャナドリヤ祭の屋外ステージで行われた石見神楽の公演

欧米で日本映画のユニークなプログラムを展開 日本の作家と海外の出版関係者をつなぐ試みも

■活動写真弁士がヨーロッパ4都市を巡回

日本では、無声映画の上映にあわせて活動写真弁士がセリフや情景を語り、楽団が生演奏で音楽を添えるという独特の公演形態が発達しました。この日本独自の「活弁」文化の紹介を目的とし、2本の無声映画、『子宝騒動』（斎藤寅次郎監督／1935年／35分）と『折鶴お千』（溝口健二監督／1935年／96分）を、活動弁士の第一人者である澤登翠^{さわとみどり}氏の語り、湯浅ジョウイチ氏（ギター・三味線）、鈴木真紀子氏（フルート）の演奏で、イタリア、フランス、ドイツで上映しました。3カ国での公演に加え、フランスのナントで行われたナント三大陸映画祭にも特別出演しました、12日間の巡回の最終地となったベルリンでは、マツダ映画社の協力により無声映画の上映で由緒あるバビロン映画館で公演が行われました。

これらの公演は、フランスやドイツの新聞で取り上げられるなど反響を呼び、フランスのLe Monde紙には、日本の伝統芸能のなかに連なる「語り」に通じる文化として「Benshi」が大きく紹介されました。公演も各地で好評を博しました。

■米国リンカーンセンターで「日活創立100周年」上映会を実施

日本最古の映画会社・日活は2012年に創立100周年を迎えます。そこで、2011年10月、日活が制作した映画作品の大規模な回顧上映を、米国・ニューヨークのリンカーンセンターで実施しました。日活、東京国立近代美術館フィルムセンター、国際交流基金本部が所蔵するプリントを中心に、戦前の時代劇から、戦後のアクション映画、青春映画、

そして現在、世界的に注目されている園子温監督の作品まで、バラエティあふれる37作品が上映されました。回顧上映会のオープニング・ゲストとして、往年の日活を代表するスター、宍戸錠氏も登壇し、華やかな幕明けとなりました。この上映を皮切りに、フランスのナント三大陸映画祭、パリのシネマテーク・フランセーズ（いずれも助成事業）でも同様の特集が組まれ、2012年度も引き続き、海外の国際映画祭や基金の主催イベントへと巡回しています。

■Japanese Book News サロンの実施

国際交流基金では、日本の出版状況や出版物に関する情報を海外の出版社、編集者、翻訳者に向けて発信する英文ニューズレター『Japanese Book News』（JBN）を発行しています。

2011年度は、新たな取り組みとして、JBNで紹介した文芸作品の作家が、日本在住の翻訳者や将来翻訳を志す人達と、作品について語り合う、「Japanese Book News サロン 現代日本作家と語る」を開催しました。

JBNの編集委員である東京大学教授・沼野充義氏を聞き手に、第1回は角田光代氏を迎え、『ツリーハウス』（文藝春秋社刊、JBN No.68 2011年夏号で紹介）を中心に、また、第2回は川上弘美氏を招き、『風花』（集英社刊、JBN No.58 2008年冬号で紹介）を中心に、ディスカッションが行われました。2回のサロンで語られた内容は、いずれも国際交流基金のウェブマガジン「をちこち」に掲載されています。

[第1回：東京大学山上会館（東京） 2011年9月27日、第2回：国際交流基金本部・JFIC ホールさくら（東京） 2012年1月24日]



[上] 米国・ニューヨークのリンカーンセンターでの「日活創立100周年上映会」でファンに囲まれる宍戸錠氏 写真提供：日活株式会社
[右] ベルリンでの活動弁士と演奏による公演

日本から海外へ、海外から日本へ さまざまな分野の専門家が各地で交流

■綿矢りさ ドイツ、イタリア講演の旅

2004年、史上最年少の19歳(当時)で『蹴りたい背中』で芥川賞を受賞し、世界各国で作品の翻訳が出版されている若手作家・綿矢りさ氏を2011年9月、ドイツとイタリアへ派遣。ドイツでのベルリン国際文学祭、ハーバー・フロント文学祭(ハンブルク)での講演の他、ケルン、イタリア・ローマの計4都市において、綿矢氏の作品のドイツ語・イタリア語への翻訳を行った翻訳者との対談や、現地の高校生や女優を交えた作品の朗読会を実施し、各地の日本文学愛好者らと交流を深めました。

■若手職人が初挑戦！ 和菓子の魅力を東南アジアへ

日本の伝統の味であり芸術ともいわれる和菓子を紹介するために、2012年2月、全国和菓子協会推薦の若手和菓子職人の明神宜之氏、吉橋慶祐氏、小泉直哉氏をタイ・バンコク、マレーシア・クアラルンプール、フィリピン・マニラの3カ国3都市に派遣し、紹介イベントを実施しました。各会場で細やかで美しい伝統の技を披露するとともに、一般市民や料理関係者向けのワークショップも開催。参加者はそれぞれに和菓子の魅力を満喫しました。このイベントは各地の地元メディアでも多数取り上げられ、広く紹介されました。

■欧州・中東・北アフリカ11か国から教員が来日

2011年10月、欧州・中東・北アフリカ11か国から次世代の若者層に影響力をもち初等・中等教育課程の教育関係

者52名を、約2週間の日程で日本に招へいしました。滞在期間中、参加者は日本文化の体験やセミナー、学校訪問、ホームステイなどのプログラムを通じて日本への理解を深めました。帰国後は、参加者が日本で得た経験・知識を自国において還元することにより、次代を担う青少年の日本理解と国際相互理解が促進されることが期待されます。

■日本画修復の専門家らの招へい研修

日本特有のものとおもわれがちな和紙。実は、世界中で文化財、美術品の修復に利用されています。2011年12月、モンゴル、ルーマニア、ボスニア・ヘルツェゴビナから9人の修復専門家が来日しました。一行は日本伝統文化の精華である京都、伝統的な和紙づくりのふるさと高知、古くから大陸との文化交流の窓であった福岡を巡り、和紙に関する知見を深めました。

■アゼルバイジャン国立美術館所蔵品調査

アゼルバイジャン国立美術館は同国随一の美術館で、東洋美術コレクションを約300点所蔵していますが、日本美術品と中国・アジア美術品の判別が難しいため、展示することができない状況でした。このため、同美術館の要請を受けて、所蔵品調査と調書作成のために秋田市立千秋美術館館長の小松大秀氏と東京文化財研究所主任研究員の江村知子氏のふたりの専門家を派遣しました。その成果は今後の収蔵・展示活動に活用される予定です。



[左] ケルンのカフェでドイツ小説家マリー・マルティン氏(左)と対話する綿矢りさ氏(右端) 撮影: June Ueno

[中] 東南アジア3都市で和菓子の魅力を紹介した3人の若手職人、(左から)吉橋慶祐氏、小泉直哉氏、明神宜之氏

[右] 和紙の知識を京都の文化財修理工房で学ぶ海外の修復専門家達



高校生が日本の生活を体験。大学生が中国で交流活動。 多角度から“心と心のつながり”をつくる

■中国高校生長期招へい事業

日中交流センターでは、中国の高校生に約11カ月間、日本で生活する機会を提供しています。日本の高校に通い、同世代のクラスメートやホストファミリーなど多くの日本人と交流するなかで、日本の社会や文化を実感に基づいて理解してもらう、そうした草の根の交流を通じて、将来の日中関係の礎となる若い世代の信頼関係を構築することが本事業のねらいです。

6年目を迎える2011年度には、前年度から日本に滞在していた第五期生38名のうち29名が東日本大震災の影響で一時的に帰国を余儀なくされたものの、そのうち22名が再来日を果たし、7月には31名が本来の期間を全うして帰国の途につきました。続いて8月末には、第六期生32名（男子8名、女子24名）が来日。2012年7月まで各地で生活しています。

高校生たちは、日々の勉強、クラブ活動、学校行事、ホームステイなどを体験することによって自立心や協調性を身につけます。また、受入校の先生やホストファミリーが、時に優しく、時に厳しく指導し、彼らの成長を後押ししてくれます。こうしたひとつひとつの経験を通じて、将来の日中関係の礎となる若い世代に心と心のつながりが築きあげられていくことが期待されます。

また、2011年度は、日本側受入校および中国側出身校の教員が互いの教育現場を訪ねあう「日中高校教員相互訪問事業」も実施し、本事業の更なる発展と内容の改善に役立っています。

■「ふれあいの場」の設置・運営

「ふれあいの場」（中国語名：中日交流之窗）は、日本に関する情報が少ない中国の地方都市において、日中の文化を体験

できる交流の場です。2010年までに、四川省成都市、吉林省長春市、江蘇省南京市、吉林省延辺市、青海省西寧市、江蘇省連雲港市、黒龍江省ハルビン市、重慶市、広東省広州市の9カ所に開設され、2011年度は、遼寧省大連市、浙江省杭州市に新設されました。

「ふれあいの場」では日本の雑誌、書籍、DVD等を通じて現代の日本文化に触れる機会を提供しているほか、多様な日中文化交流イベントも実施しています。2011年度は、西寧、南京、連雲港などで日本の大学生グループの企画による学生交流事業が実施されたほか、中国に滞在中の日本人学生と現地の中国人学生とでイベントをつくり上げる、「ふれあいの場活性化チーム」（通称「F活」）の活動も実施しました。また、2011年度は、東日本大震災の直前まで「中国高校生長期招へい事業」で招へい生を受け入れていただいていた仙台の高校から、仙台の姉妹都市である長春の「ふれあいの場」に、生徒7名が訪問し、現地の学生らと交流しました。参加した仙台の高校生からは、被災地への中国からの支援に対して自然と感謝の言葉が述べられ、両国の絆の固さを感じられました。

■「心連心ウェブサイト」運営

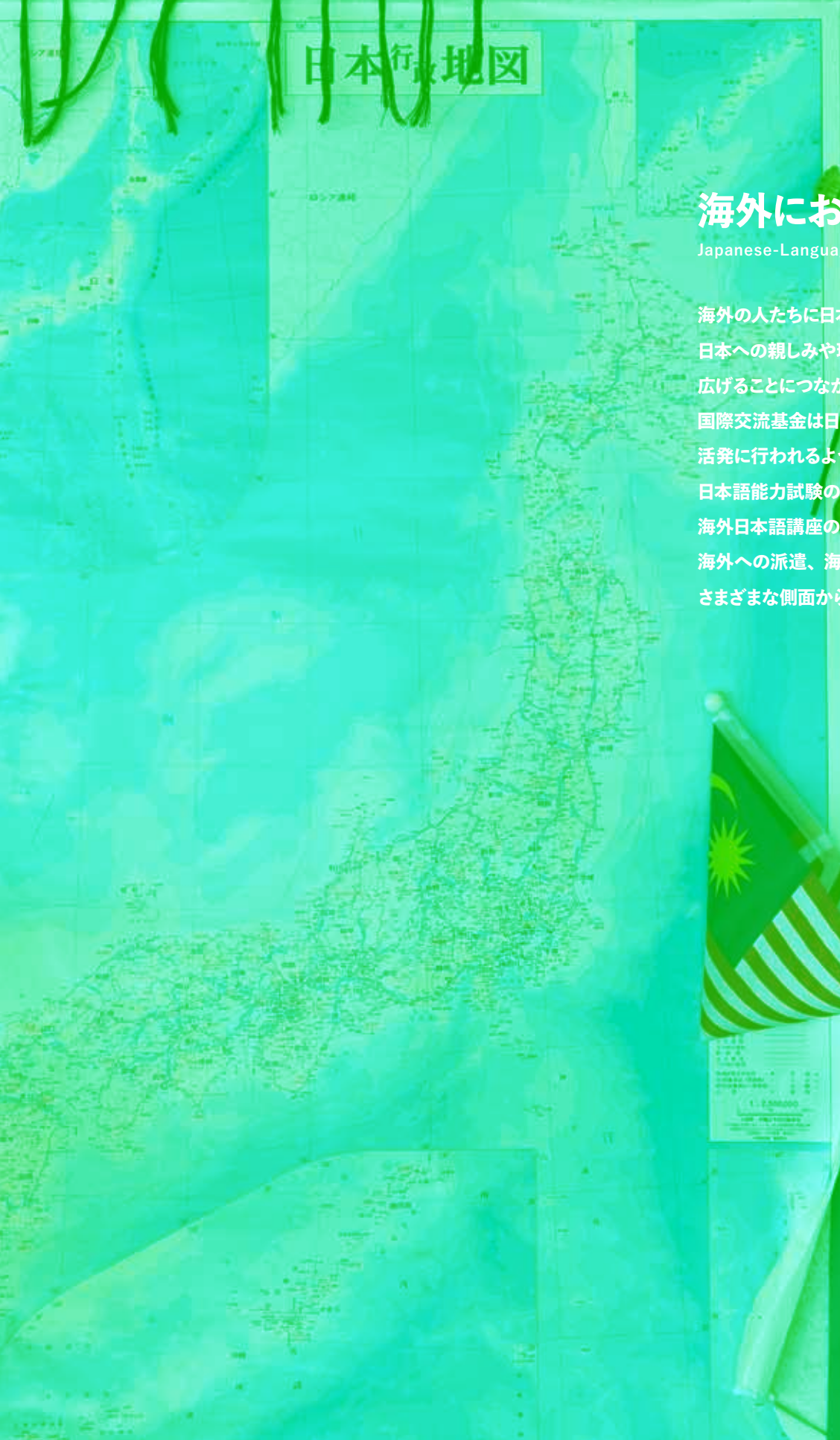
日中交流センターが運営する「心連心ウェブサイト」（<http://www.chinacenter.jp/>）は、日中同時翻訳機能を使って日中の若者たちが日本語・中国語のどちらでもやりとりできるブログ形式のコンテンツを備えています。これらは、国際交流基金のさまざまなプログラムで来日・訪中する学生たちが事業終了後も交流を続ける場としてだけでなく、等身大の両国の若者の姿を紹介することで、未来の日中友好の礎を築くことを目指しています。



[上] 江蘇省の連雲港ふれあいの場で日本の学生がコスプレを披露して交流
[左] 2011年の夏に来日した中国高校生長期招へい事業の第六期生



日本行政地図



海外における日本語教育

Japanese-Language Education Overseas

海外の人たちに日本語を知ってもらうことは、
日本への親しみや理解を世界に
広げることにつながります。

国際交流基金は日本語教育が世界で
活発に行われるよう、全世界規模での
日本語能力試験の実施や教材開発、
海外日本語講座の運営、日本語教育の専門家の
海外への派遣、海外で教える教師の訪日研修など、
さまざまな側面から日本語教育を支援しています。



海外における日本語教育

Japanese-Language Education Overseas

海外日本語教育の促進

国際交流基金が日本語教育事業を行うなかで、その使命の重要な部分をなすのは日本語教育の基礎基盤をつくることです。日本語教育のノウハウの共有、教育機関の調査や情報交流の場の提供、海外拠点等における日本語講座の実施など、日本語教育を世界に広げるためになくてはならない基盤をつくるために、継続的な活動を続けています。

教師・教育機関への支援

国際交流基金は、ひとりの日本語教師の指導が、たくさんの生徒に影響を与えることを重視し、海外の現場で日本語を教える教師の指導力向上を図るプログラムを展開しています。教師育成だけでなく、海外の日本語教育機関への助成や日本語教育のための催しに対する助成なども行っています。

学習者への支援

国際交流基金は、ふたつの側面から学習者を支援します。ひとつは教材の制作、将来の教師の養成等、日本語の学習環境の向上をはかる間接的支援。もうひとつは、海外の日本語学習者を招へいしての日本語・日本文化研修（専門的な日本語研修や学習奨励研修）といった直接的な支援です。海外の教育機関単独では、実施や継続が難しいタイプの学習者支援を継続して行っています。



海外日本語教育機関調査

世界中に広がる国際交流基金の拠点、在外公館等の協力を得て、全世界で日本語教育を行う機関の調査を3年毎に実施しています。これは日本語教育に関する世界で唯一の大規模な調査で、調査結果は新聞・雑誌等のメディアで数多く引用されます。2009年の海外日本語教育機関調査では、全世界に日本語学習者数は365万人、日本語教師数は4.9万人、日本語教育機関数は約1.5万機関といった結果が得られました。

日本語専門家の海外派遣／ 教育機関・プロジェクト支援

海外の教育機関に日本語教育の専門家や指導助手を派遣しています。日本語専門家の活躍の場は広く、世界各地で約120名が活躍しています。また、海外の非営利団体が運営する日本語講座や、海外で開催される日本語弁論大会、日本語教育に関する学術会議・ワークショップ、日本語教師研修会等への助成も行っています。

日本語能力試験

[試験センター]

日本語を母語としない人を対象に日本語能力を測定し、認定するための試験です。試験は世界各地および日本国内で1年に2回、一斉に実施されます。国内外合わせて62の国と地域で、約61万人が受験しました。小学生から社会人まで幅広い層の受験者によって、日本語の実力測定のため、就職や昇進のため、大学等への入学のためと、さまざまに活用されています。

JF日本語教育スタンダード開発 日本語教材開発

日本語の教え方、学び方、学習成果の評価の仕方を考えるために独自のツールの開発を継続的に進めており、海外における日本語教育のさまざまな基盤整備の中心的役割を担っています。また、インターネットや映像を活用した教材開発・運営・普及を行っています。

JFにほんごネットワーク (さくらネットワーク)

日本語普及と教育の質の向上のため、世界各地の中核的な日本語教育機関や日本語教師会をつなぐネットワークです。国際交流基金の海外拠点と、国や地域全体の日本語教育に波及効果のある事業を実施する機関・団体が中核メンバーとなり、連携して世界各地の日本語教育をサポートしています。2011年度末に118機関(42カ国2地域)になりました。

海外日本語学習者への研修

[関西国際センター]

日本と各国間の良好な関係を築くために重要な任務にあたる諸外国の外交官、政府・公的機関の若手職員や、研究者、大学院生などを対象に日本語研修を行っています。また、諸外国での日本語教育を奨励するため、日本語を学習する各国の大学生、高校生の中から成績優秀者を日本に招く研修も実施しています。2011年度は、100カ国・地域から597名が参加しました。

海外日本語講座 (JF講座)

「JF日本語教育スタンダード」に準拠した新しいタイプの日本語講座を実施し、より学びやすく、教えやすい日本語の学習モデルを提示します。また言葉と文化の総合学習を重視し、日本語を使った相互理解を推進します。2011年度末において、世界24カ国のJF講座で約8千人が日本語を学んでいます。

海外日本語教師への研修

[日本語国際センター]

海外の外国人日本語教師のうち、各国・地域で指導的役割を果たしている人や、今後指導的立場にたつ人に対する高度な研修を行っています。また、教授経験の浅い教師対象に日本語力と日本語教授能力の向上を目指すなど、参加する教師の属性に応じて、さまざまな研修プログラムを実施しています。2011年度は、57カ国から434人の日本語教師が参加しました。



1



2



3



4



5



6



7

1. 大阪赤十字病院の日本赤十字社・災害拠点病院ロジスティクスセンターを訪れ、日本赤十字社の国際救援や国内救護活動について学ぶ関西国際センターの研修生／2. 日本語、日本語教授法および日本事情の授業を行う日本語国際センターでの教師研修。より豊かな日本語教育を目指したプログラムが実施されている／3. 書道の授業を受ける関西国際センターの研修生。同センターでは、日本語の研修に加え、書道、茶道、華道、浴衣の着付け、和太鼓、武道など、日本の文化・社会への理解を深めるための研修も行っている／4. 文化体験の授業で空手を学ぶ関西国際センターの研修生／5. ベラルーシのミンスク国立言語大学で日本語を学ぶ学生。成績優秀な日本語学生は日本で研修を受ける機会も／6. 2011年6月に桜美林大学で開催された日本語弁論大会（共催：財団法人国際教育振興会、国際交流基金）。中国出身の李明玉（前列左から4人目）が外務大臣賞を受賞／7. ロサンゼルス日本文化センターで2012年1月からスタートした日本語講座「JF Nihongo / Business Japanese」の受講生

日本語教育の専門家派遣と 海外の日本語教育ネットワークを拡充

■世界38カ国で122人の日本語教育の専門家が活躍

国際交流基金は、海外各国における日本語教育の定着と自立化の促進を目的に、各地に日本語教育の専門家を派遣しており、2011年度は38カ国に向けて、122人の日本語専門家を派遣しました。派遣された日本語専門家は、現地教師の育成、カリキュラム・教材作成や教師間ネットワーク構築への支援、教室での日本語教授など、それぞれが取り組むべきミッションのもとに活動を行っています。

たとえばベトナムでは、国際交流基金の日本語専門家が中等教育への日本語導入プロジェクトに全面的に協力しています。ベトナムでは2005年から日本語が中等教育の第一外国語として選択できるようになりましたが、国際交流基金は2003年から中等教育への日本語導入のための日本語専門家を派遣して、教師の研修セミナー、標準教科書の制作、授業現場へ赴いての指導等を行い、日本語教育プログラムの整備、教育水準の向上に取り組んできました。

2012年には、2005年に第一外国語として日本語の勉強を始めた第1期の生徒が高校を卒業し、社会に出ていきます。大学への進学、就職等、歩んでいく道はさまざまですが、将来彼らが日本語を使って日本人とコミュニケーションをとり、日本とベトナムの友好を未来へ繋ぐ架け橋となってくれることを期待しています。

■世界118機関に拡大したさくらネットワーク

JFにほんごネットワーク（通称：さくらネットワーク）は、世界各地の日本語普及と教育の質の向上のため、国際交流基金の海外拠点や、国際交流基金と協力・連携をとりながら活動する各地の中核的な日本語教育機関、日本語教師会を

つなぐネットワークです。2008年にネットワークの構築を開始し、2010年度末までに中核メンバーを100機関にするという目標を2010年度中に達成、2011年度末には42カ国2地域118機関にまで拡大しています。

こうしたネットワークを活かすため、「さくら中核事業」というプログラムを設け、海外拠点においてさまざまな日本語事業を実施しているほか、他の中核メンバーが実施するプログラムのうち、国や地域全体での日本語の普及・拡大・発展につながる波及効果の高い事業を支援しています。

また、国際交流基金の海外拠点のない国のためには、「日本語普及活動助成」というプログラムを用意しており、教材購入助成や講師の謝金助成など、各国・地域のニーズに対応したきめ細かな日本語教育支援を心がけています。

カンボジアの「さくら日本語・日本文化普及キャラバン」は2011年度の「さくら中核事業」の支援により実現した事業のひとつです。この事業は、王立プノンペン大学が現地の日本語学校の協力を得て企画したもので、日本語教師に加えて、歌や折り紙などの日本文化を伝える先生、日本語学習体験を伝える学生、そして日本語学習から繋がる将来像を伝える社会人がチームを組み、地方の高校を巡回して体験学習やセミナーを行いました。この事業により、日本語に触れる機会がめったにない地方の高校生に日本や日本語に興味を持つ機会を提供したことで、将来の日本語教育の芽が出る契機になりました。この芽を育て、やがては大きな森にしていくことが国際交流基金に課せられた使命です。



[上] タイで日本語教師を目指す教育実習生達
[左] ハンガリーで行われた中東欧日本語教師研修会

海外61の国と地域、198都市で 約49万人が日本語能力試験を受験

日本語能力試験 (Japanese-Language Proficiency Test 略称: JLPT) は日本語を母語としない人達の日本語能力を測定し、認定するための試験です。N1からN5までの5つのレベルに区分されており、受験者は自己の日本語能力に適したレベルを受験することができます。試験は、N1とN2は「言語知識(文字・語彙・文法)・読解」と「聴解」の2科目、N3～N5は「言語知識(文字・語彙)」、「言語知識(文法)・読解」、「聴解」の3科目で構成されています。

■海外で約49万人が受験

国際交流基金は世界各地の現地共催機関と協力して、2011年7月3日および12月4日に試験を実施しました。海外では2回の試験で合わせて約49万人が受験しました。台湾での試験は公益財団法人交流協会と共催しています(2011年度より、台湾での試験実施業務は国際交流基金が担当することになりました)。日本国内では約12万人が受験し、国内・海外を合わせ約61万人が受験しました。国内の試験は、共催者である公益財団法人日本国際教育支援協会が実施しています。

7月の第1回試験は、海外20の国と地域の96都市と日本で実施されました。国際交流基金が実施業務を担当した海外試験の応募者数は約25万人、受験者数は約21万人でした。

12月の第2回試験は、海外60の国と地域の196都市と日本で実施されました。国際交流基金が実施業務を担当した海外試験の応募者数は約32万人、受験者数は約28万人でした。

第1回試験では、江陵(韓国)、南通、西寧、福州(中国)が新規実施都市となり、第2回試験では、チリ、エクアドル、

オーストリアの3カ国が新規実施国、ジョホールバル(マレーシア)、モンテレイ(メキシコ)、エディンバラ(イギリス)が新規実施都市となりました。

■試験結果の活用とオンライン申し込み実施の拡大

日本語能力試験は、1984年の開始以来、25年以上の歴史がありますが、近年、受験者層の拡大および受験目的の多様化が見られるようになりました。それに伴い、試験を実施している多くの国で、試験の成績が大学入試や資格試験の要件、就職や昇進・昇格にあたっての判断基準など、さまざまな形で活用されるようになっていきます。

そのため、受験者が試験をより受験しやすくなるよう、オンライン申し込みの実施地拡大を進めています。2011年は、エディンバラ、バルセロナ、マドリッド(スペイン)で初めてオンラインによる申し込みを実施し、オンライン申し込みを実施している国は8つの国と地域になりました。また、2012年の試験からは、試験を実施するすべての国と地域でインターネットでの試験結果の閲覧が可能になる予定です。

■『日本語能力試験 公式問題集』を発行

2012年3月、『日本語能力試験公式問題集』を発行しました。本書は、2010年の改定後の日本語能力試験についての初めての公式問題集です。N1からN5まで各1冊ずつ、5冊に分かれており、各レベルとも試験1回分に相当する数の問題を掲載しています。試験の練習に使えるよう、問題用紙の表紙、解答用紙のサンプル、聴解試験用CD、聴解試験問題のスク립ト(音声文字にしたもの)も含まれています。また、2012年6月からは日本語能力試験公式ウェブサイトから無料でダウンロードが可能となります。



[上] 韓国・ソウルでの日本語能力試験のようす
[右] 新たに発行された『日本語能力試験 公式問題集』



海外の日本語教育の質を高めるための教師支援と 日本との架け橋となる日本語学習者を奨励する研修プログラム

■日本語教育を牽引する57カ国434名の教師が研修参加

国際交流基金の「海外における日本語教育」事業のなかのひとつの柱は、教師を支援するための事業です。2009年に国際交流基金が実施した「日本語教育機関調査」によると、海外での日本語教育上の問題点として、日本語教師の数の不足だけでなく、教師の日本語教授技術や日本語運用力の不足や教材不足が挙げられています。こうした問題に対応するため、国際交流基金の附属機関である日本語国際センター（埼玉県さいたま市）では、海外で活躍する日本語教師の訪日研修や、教材・カリキュラム開発などの教師支援活動を行っています。

日本語国際センターは、1989年に設立されて以来、8千人以上の日本語教師を迎えており、海外の日本語教師が研修を受ける機関として、高い評価を得てきました。2011年度は、最短2週間から最長1年間の期間を要すさまざまなタイプの19の研修を行い、のべ57カ国から434人の日本語教師が日本語国際センターの研修に参加しました。

中核的な教師研修事業としては、教授経験が6カ月以上5年未満の若手外国人日本語教師を対象とした海外日本語教師長期研修（6カ月）があります。2011年度は30カ国から57名が参加しました。研修参加者は、日本語や日本語教授法の授業だけでなく、書道、折り紙、生け花、着付け、茶道、日本舞踊等の文化体験プログラムや、日光や関西方面への研修旅行にも参加します。

研修参加者は日本滞在を活用し、日本語運用力の向上に努め、日本社会・日本文化への理解を深めるように積極的に活動していました。彼らの今後の活躍が、これからの日本語教育の発展につながっていくことを期待しています。

■日本語学習者と東日本大震災

日本語教育支援のもうひとつの柱は「日本語学習者への支援」です。多様化する日本語教育のニーズに対応するた

め、1997年に大阪府に設立され、2012年に設立15周年を迎えた関西国際センターでは、職業上、日本語能力を必要とする海外の専門家を対象とした「専門日本語研修」と、海外で日本語を学んでいる大学生・高校生等を対象とした「日本語学習者訪日研修」を実施しています。2011年度は、100の国と地域から597名が関西国際センターの研修に参加しました。

2011年度、「日本語学習者訪日研修」のひとつとして、新たに「米国JET記念高校生招へい」研修を開始しました。2011年3月11日の東日本大震災ではたくさんの犠牲者が出ましたが、そのなかには、日米の架け橋になろうとJETプログラムにより来日し、外国語指導助手として活躍中に、石巻市で亡くなられたテイラー・アンダーソンさん（アメリカ・バージニア州出身）と、陸前高田市で亡くなられたモンゴメリー・ディクソンさん（アメリカ・アラスカ州出身、2009年度国際交流基金全国JET日本語教授法研修修了者）のお二人がいました。この研修は、ふたりの遺志を継ぎ、将来日米の架け橋となることが期待される米国人高校生を対象に、日本語・日本文化への理解を深め、同世代の日本の高校生達と交流を深めることを目的に実施するものです。

2011年は、全米各地から寄せられた276人の応募者のなかから選抜された高校生32名を招へいし、7月19日～28日にかけて、関西国際センターを拠点に、大阪府立泉北高等学校訪問と同校生徒との交流、ホームステイ、JET外国語指導助手（ALT）や国際交流員（CIR）との交流、京都・神戸への研修旅行などを実施しました。また、文部科学省の協力を得て、参加者のうち19名が岩手県立不来方高等学校を訪問し、同校生徒と交流したほか、震災の犠牲者慰霊を目的に山中湖で行われた灯籠流しに向け、各々のメッセージを記した灯籠を作成するなど、日本語教育事業を通じて被災地や被災者と関わる取り組みも行っています。



[上] 日本語国際センターでの海外日本語教師短期研修（春期）で行われた茶道デモンストレーション
[右] 関西国際センターでの外交官・公務員日本語研修。在京大使館勤務はじめ、各国政府機関内で日本に関わる業務に就くことが期待されている若手職員が、日本語と日本事情を8カ月間にわたり学ぶ



独自教材の開発と日本語の教師、 学習者向けサイトの機能拡充と多言語化

■『まるごと 日本のことばと文化』試用版開発

「JF日本語教育スタンダード」(以下「JFスタンダード」)に準拠したコースブックとして『まるごと 日本のことばと文化』試用版を開発しました。「JFスタンダード」では、日本語を使って何がどのようにできるかという「課題遂行能力」と、異文化に触れて視野を広げ他者の文化を理解し尊重する「異文化理解能力」が必要であるとしています。この考えに基づき、日本語能力のとらえ方、レベル設定、目標設定と評価の方法など、カリキュラム設計の根幹を「JFスタンダード」に準拠し、教材化しました。2011年度は、「入門(A1)」に続き、「初級1(A2)」の開発、制作を行いました。また、学習者をサポートする学習用ウェブサイトの開発も進めました。

■「みんなの「Can-do」サイト」リニューアル公開

「JFスタンダード」では、熟達度のレベルをA1、A2、B1、B2、C1、C2の6段階とし、それぞれのレベルにおいて日本語で何がどれだけ「できる」かを、「～できる」という文(「Can-do」)を使って表しています。「みんなの「Can-do」サイト」は2010年3月に公開した、「Can-do」データベースのウェブサイトです。2011年度は、利用者からの意見をもとに、サイト機能の改善、追加などを行い、ユーザビリティの向上に努めました。

■WEB版「エリンが挑戦!にほんごできます。」が6言語に

WEB版「エリンが挑戦!にほんごできます。」は、2011年4月、それ以前の日英2カ国語版に加え、スペイン語、ポルトガル語、中国語、韓国語版を公開し、全6言語版の多言語サイトとして運用を始めました。公開から2年目となる2011年度は、多言語化の拡充としてフランス語、インドネシア語版制作を進めるとともに、本サイトを活用してもらうための広報に力を入れました。その結果、2011年度末時点で、累計アクセス数が800万(ページビュー)を超え、日本語と日本文化に関心をもつ多くの人に活用されています。

■「アニメ・マンガの日本語」5カ国語版出そう

世界中に多くのファンをもつ日本のアニメやマンガは、海外の人が日本語を学び始める大きな動機のひとつになっています。「アニメ・マンガの日本語」は、アニメやマンガを楽しんでいる人達に日本語についてもさらに興味をもってもらうことを目的としたウェブサイトで、クイズやゲームを通して楽しく日本語が学べるよう工夫されています。

2011年度には、英語、スペイン語、韓国語、中国語に加え、新たにフランス語版を公開するとともに、すべての言語で13種類のコンテンツを利用できるようにしました。また、利用者の要望に応じてマンガのなかの台詞や擬声語・擬態語が音で聞ける機能を加えました。公開から約2年、5カ国語版のコンテンツ拡充ですべて完成し、グローバルトップページを設けました。サイトの利用者も順調に増え、2011年度の総アクセス(ページビュー)数は前年度比約14%増の約240万となりました。

■「NIHONGO eな」で日本語学習情報を継続的に発信

「NIHONGO eな」は、インターネット上にある多様な日本語学習に役立つサイト、リソースを学習者に向けて紹介することを目的としたウェブサイトです。誰でも無料で利用できる日本語学習サイトやツールの「できること」「操作方法」「使い方のアイデア」をわかりやすく紹介し、英語と日本語に加え、一部は中国語と韓国語でも提供しています。

2011年度は毎月3本の紹介記事を公開し続け、新しい情報を常に加えることで、変化していくインターネットの状況に対応できるように努めました。アクセス(ページビュー)数は前年度比約33%増の約102万となりました。

■「日本語でケアナビ」の拡充

看護・介護分野で働く人の日本語学習をサポートするウェブサイト「日本語でケアナビ」(英語およびインドネシア語で提供)では、利用者の要望を受けて、「診療科」「排泄介助」等のカテゴリー検索機能を加えて利便性の向上を図りました。



[上]「アニメ・マンガの日本語」のグローバルトップページ
[左]「みんなの「Can-do」サイト」のトップページ

海外の日本語教育機関調査結果発表と 戦略的な日本語講座の拡充

■海外日本語教育機関調査 報告書を出版

国際交流基金では、世界の日本語教育の現状を正確に把握し今後の日本語教育の施策に活用するため、3年ごとに全世界を対象とした「海外日本語教育機関調査」を行っています。全世界の在外公館や日本語専門家の協力を得て、その国と地域における日本語教育機関数や学習者数、教師数、学習目的、教育上の問題点等についてのアンケート調査を実施し、2009年時点では全世界に日本語学習者数は365万人、日本語教師数は4万9千人、日本語教育機関数は約1万5千機関といった結果が得られました。2011年度には、この調査結果を報告書にまとめ出版しました。地域ごと、教育段階ごとの傾向分析はもちろん、特に学習者数上位20カ国に関しては、過去の調査結果との比較も含む詳細な分析を新たに盛り込みました。世界の日本語教育の現状を記載したこの報告書は国内外の関係者から注目され、学会や論文等でしばしば引用されます。調査対象となった日本語教育機関の詳細な情報は国際交流基金ウェブ上でも検索・閲覧できるようになっています。

■海外日本語講座 (JF講座) の拡充

国際交流基金は、海外の日本語教育における新たなニーズに対応するため2011年度より、一般成人を対象とした日本語講座 (通称: JF講座) を拡充することにしました。2009年の「海外日本語教育機関調査」の結果、海外の日本語学習者数の伸びが注目されましたが、同時に学習目的の多様化も明らかとなりました。留学や就職という実利的な目的だけでなく、日本語そのものへの興味や、アニメ・マンガ等を通して日本文化に親しみを感じ日本語も勉強してみたいという学習者が増えています。

こうした現状を踏まえ、国際交流基金の日本語講座では、日本語の教え方、学び方、学習成果の評価の方法を考える

ための新たなツールである「JF日本語教育スタンダード」を取り入れた新たなカリキュラムを導入し、講座の充実とリニューアルに取り組んでいます。

JF講座では同スタンダードに準拠した日本語教材『まるごと 日本のことばと文化』などを用いて、今まで以上に日本文化理解に重点をおいた授業が行われています。2011年度には、国際交流基金海外拠点21カ所と、ウクライナ、カザフスタンの日本センターでそれぞれJF講座が開講され、のべ8,000人の学習者が受講しました。2012年度も4カ国で新しく講座を開設し、日本語と日本文化の総合的学習を推進していく予定です。

■経済連携協定に基づく看護師・介護福祉士候補者の日本語教育

国際交流基金は、インドネシア、フィリピンと日本との二国間経済連携協定 (EPA) により日本に受け入れるインドネシア人・フィリピン人看護師・介護福祉士候補者を対象として、来日前の現地日本語予備教育事業を実施しました。研修期間は、インドネシアでは6カ月間、フィリピンでは3カ月間でした。月曜日から金曜日までは基礎的な会話と読み書きを習得する日本語の授業を行い、土曜日は日本社会・日本人への理解を深め、日本の生活習慣などの基礎知識を習得する社会文化理解プログラムや日本の看護・介護事情についての講義を行いました。

候補者のほとんどは、この予備教育で日本語に初めて触れる人達です。たくさんの学習内容をこなさなければならぬ厳しい研修でしたが、日本で働くという目標をもった彼らの意気込みと学習意欲は大変高く、互いに励ましあいながら、日本語の授業のみならず、日本についてのポスター作成と発表、日本語の書き取りコンテスト、朗読発表会などの活動に元気に取り組んでいました。



[上] フィリピンで行われた看護師・介護福祉士候補者のための日本語教育
[左] 2012年2月にスペイン・マドリッドで実施された海外日本語講座のなかのマナー講座

日本研究・知的交流

Japanese Studies and Intellectual Exchange

海外での日本研究を支援すること、
そして海外の社会や文化への理解を日本のなかで
広げていくことは、相互理解を深め、
心をひとつにして共通の課題の解決に
向かっていくことにつながります。

国際交流基金は深い日本理解と人的ネットワークの
形成を促進するため、海外の日本研究者を支援し、
また国際的に著名な学者を日本に招くなど、
学術や研究を通じて国際交流を積極的に
推し進めています。

日本研究・知的交流

Japanese Studies and Intellectual Exchange

海外における日本研究の促進

海外で行われる日本研究は、日本人や日本社会への理解を深めるだけでなく、それぞれの国と日本との良好な関係を維持するために重要です。日本を研究する人が活動を継続できる環境を構築するため、その国や地域において日本研究を担う中核的な機関への支援や、研究目的の来日の機会となるフェローシップ供与を行っています。また、研究者同士を結びつける機会を積極的に提供し、研究者間の交流の活性化をはかっています。

知的交流の促進

国際的な共通課題を理解し、その解決に向けて知的リーダーが国境を越えて取り組む場として、ワークショップや国際会議などを開催し、国際的な対話や研究を促進しています。また、さまざまな分野の有識者、専門家への訪日機会の提供や、多様な担い手が企画・実施する事業への支援を行っています。こうした知的交流を通じ、多層的、多角的な国際相互理解を推進することで、世界の発展と安定に向けた知的貢献をめざします。

ネットワーク強化

研究者間の緊密なネットワークを構築するため、国際会議やワークショップなど、対話を促進する場を企画しています。日本研究では、分野を越えた専門家同士の連携を促進するため、日本研究の国際会議を支援しています。また、海外の知日層との関係強化のための学会や、日本に留学経験のある日本研究者同士のネットワークづくり、国際会議の開催経費等、活動の一部を助成することでネットワークの多様化を推進しています。

フェローシップ

日本研究や知的交流の分野で優れた活動をする個人に対して助成を行います。日本研究の分野では、海外の研究者、博士論文執筆者、短期滞在研究者に対しフェローシップを供与しています。知的交流の分野では、海外の有識者・専門家に対し訪日機会を提供しています。また、日米のグローバルなパートナーシップを強化する観点から、研究者・ジャーナリストの研究・交流活動を支援する安倍フェローシップを実施しています。

機関支援

日本研究の分野において、各国で中核的な役割を担う大学や日本研究センターに対し、基盤を強化し、人材を育成するための支援をしています。研究や国際会議への支援のみならず、各機関のニーズに応じて教員拡充のための支援、客員教授の派遣、図書の拡充のための支援などを行っています。こうした包括的・継続的な支援により、世界中の日本研究機関の活動がより活性化するよう、事業を展開しています。

日米センター

[Center for Global Partnership]

日米センターは、日米両国が世界的視野で協力し、各界各層における対話と交流を促進するためのプロジェクトを実施しています。日米共同プロジェクトに対する助成、フェローシップ、専門家等の派遣・招聘、各種調査等の事業を通じて、グローバルな課題解決に向けた両国の対話の促進と担い手人材の育成に努めています。



1



3



2



4



5



6



7



9



8

1.「日欧(絆)プロジェクト～コミュニティが育む連帯と多様性～」でパネリストでもある音楽家が即興演奏も披露 撮影:相川健一／2.東京都大田区で江戸時代から続く刃物づくりを見学する、ロシアから来日した若手日本研究者／3.日独シンポジウム「東日本大震災と新旧メディアの役割-日独における地震報道に関する比較の視座」(ベルリン日独センター)／4.日系ブラジル人アーティストのチチ・フリーク氏が宮城県石巻市の仮設住宅の壁面にグラフィティを描くプロジェクト 撮影:相川健一／5.アジア・リーダーシップ・フェロー・プログラム(ALFP)で太田昌秀・元沖縄県知事らとの対話／6.10周年を迎えた「日中韓次世代リーダーフォーラム」／7.北京日本学術センター修士課程大学院生の訪日研修／8.日印文明対話公開シンポジウム「アジア・ルネサンス-洪沢栄一、J・N・タタ、岡倉天心、タゴールに学ぶ」／9.多文化の街新大久保を訪れる「日本・韓国・欧州 多文化共生都市国際シンポジウム」の参加者 撮影:相川健一

最新の知見で、 多角的な日本研究の発展をめざす

■第2回東アジア日本研究フォーラムを宮城県で開催

国際交流基金は、2011年12月、宮城県松島町において「第2回東アジア日本研究フォーラム」を開催しました。このフォーラムは、2010年12月に韓国・済州島で行われた「東アジア日本研究フォーラム」に続くもので、東アジア地域における日本研究をめぐる現状と課題を把握しつつ、国と地域を越えた研究者間のネットワーク構築を目指し、日本、中国、韓国の研究者が集まりました。今回は台湾からの参加者も含めて総勢26名を迎え、日本語による活発な議論が交わされました。

またフォーラムに合わせ、市民に向けて復興のエールを送る公開シンポジウム「東アジアは3.11をどう論じたかー東北復興へのメッセージ」を仙台市で開催するとともに、震災で大きな津波被害を被った東松島市の視察を行いました。

事業終了後、参加者からは「日本研究について、もはや一国主義、自国主義を乗り越えるべきである」、「東北復興のメッセージを東アジアの近隣諸国との横のつながりを考えながら発信していこうという姿勢に賛成である」等のコメントが寄せられ、東アジア地域の研究ネットワークを更に推進する重要性を再確認する貴重な機会となりました。

■アルザス・欧州日本学研究所で「大正／戦前」に関する集中セミナー実施

フランスのアルザス・欧州日本学研究所(CEEJA)において、国際交流基金は同研究所と共催で、「大正／戦前セミナー」を実施しました。学習院大学の井上寿一教授を講師に迎え、高い専門性と日本語運用力をもつ欧州の若手日本研究者10名が、2日間の集中ワークショップに参加しました。

「大正／戦前」をキーワードに、「グラフ雑誌『満州グラフ』

に見る戦前日本における満州国の視覚的プロパガンダ」「大正ロマンにおけるアール・ヌーヴォーの受容」「“アジア”を抱きしめて：アジア主義論の転換としての大正時代」など各自の最新の研究を巡り、議論を交わしました。

参加者に共通しているのは、日本人や日本在住の研究者とは異なる視点から日本の思想や文化構成の過程を研究し、より深い文化研究につなげていく姿勢です。国際文化交流として日本研究を支援することは、日本の専門的理解者を増やすだけでなく、実は日本に関する研究そのものを深化させ、日本についての多様な見方を育む効用もあることが実感される知的興奮に満ちたセミナーとなりました。

■米国の歴史ある日本研究を下支え

海外で日本研究が最も進んでいる国といえば、歴史的にも、人材や機関の充実度の面でも、やはり米国といえるでしょう。国際交流基金の米国での日本研究支援事業では、特別に諮問委員会を設置し、支援方針の策定ならびに支援先の選定について意見を得ています。

また、大学等の教育機関向けの助成事業では3年間の継続支援を通して教員の拡充や研究会議、学生向けの日本での研修等を支援し、日本研究の定着を図り、助成期間終了後には大学の自己資金での事業継続を促します。こうした支援により米国における日本研究者数は順調に増加してきたことが、国際交流基金が進める北米日本研究調査によりわかっています。

米国における日本への関心は震災により大きく落ち込むようなことはなかったものの、近年は米国国内の経済上の理由により、日本研究を含む地域研究全体に予算縮小の兆しが見られます。こうした状況のなかで米国の日本研究を下支えするための支援が必要になっています。



[上] アルザス・欧州日本学研究所での「大正／戦前セミナー」のようす

[左] 宮城県松島町で行われた第2回東アジア日本研究フォーラムのシンポジウム

日本研究の中核的機関、ネットワーク、研究者を総合的に支援

■中国、韓国で大型学術大会を開催

2011年9月に日本近世文学会・秋季大会が、韓国の高麗大学校で国際交流基金の日本研究機関支援を受けて開催されました。1951年に創設された同学会は、日本の近世文学を研究する日本における、もっとも代表的な学会ですが、国外での開催はこれが初めてでした。初の海外開催となった本大会は、日韓両国の報道機関から大きく注目され、プログラムの内容や意義が広く紹介されました。高麗大学校は、すでに日本研究が成熟した段階に達した日本研究機関ですが、韓国でこうした学会を開催したことは、韓国の日本研究をさらに促進する刺激となったと言えます。

また、中国の四川外語学院では、同年10月に国際シンポジウム「地域研究としての日本学—学際的な視点から」が開催されました。本シンポジウムでは、「中国における『地域研究としての日本学』の現状とあり方」など、現在注目を浴びている問題が議論されるとともに、中国各地の日本学研究者と日本の研究者とが活発に研究成果を交わしました。また、「地域研究」と「学際的な視点」のキーワードのもと、「新しい日本学」の萌芽についても語られました。

■年毎に充実するヨーロッパの日本研究ネットワーク

国際交流基金は、海外で日本への深い理解をもつ知日層の形成を目指し、日本研究者ネットワークへの支援も行っていますが、ヨーロッパではかつて長年にわたり言語・国家・大学間の壁に阻まれて、研究者の多くは孤立した形で研究を行ってきました。しかし、1973年にヨーロッパ日本研究協会が設立されて以降、研究者間の交流が活発に行われるようになり、今日、日本研究は学術研究の一分野としての確かな地位が築かれました。国際交流基金では、長年に渡り、ヨーロッパ日本研究者協会を支援し、日本研究ネットワークの発展を支えています。

2011年はエストニアのタリン大学にてヨーロッパ日本研

究協会の総会を実施、800人以上の参加者が最新の学術成果を発表・共有しました。震災後初めての大会ということもあり、国際交流基金は「震災が日本研究に与える影響」と題して特別セッションを設け、各国の研究者が活発な議論を交わしました。西欧に比べて、日本研究の分野では後発地域とされる東欧で総会が開かれることは、日本研究ネットワークの拡大において非常に大きな一歩であり、今後の更なる発展が期待されます。

■優れた研究をフェローシップで支える

海外の日本研究者は、それぞれの国で、学術的な知見に基づき、日本についての正しい情報・理解を広めることに寄与しています。国際交流基金は諸外国における日本研究の発展のため、日本に関わる研究を行う研究者が日本で研究や調査を行うためのフェローシップを供与しています。

2011年は、東日本大震災の直接的被害の甚大さが世界の注目を集めた一方、原発事故に対して海外から厳しい批判もありました。そのなかで、ロシアの元フェローでモスクワ国立国際関係大学のドミトリー・ヴィクトロヴィッチ・ストレルツォフ教授らは、バランスが取れた日本の情報を発信し、事実に基づかない日本について誤解の広がりを防ぎ、日本を研究する知識人としての役割を果たしました。

2011年度フェローでトルコ出身のシャーヒン＝エスラー・ギョクチェ氏は、ハーバード大学博士課程に所属して日本の「笑い」を理論的に研究するかたわら、日本の落語家のもとで修行、芸名を取得し、師匠や兄弟子とともに落語公演を行いました。「笑い」という各国の文化に深く根ざした難しい研究テーマを理論と実践の両面から研究し、その成果を学会だけでなく広く一般の日本人との交流にも発展させたといえます。

人文や社会科学など幅広い研究テーマの優れた研究者を支えることで、世界の日本研究の発展に貢献しています。



[上] 北京大学現代日本研究センターの訪日研修

[右] 国際文化会館（東京）で開催された日本研究フェローの懇談会



多層的、多角的な国際相互理解を推進し、世界の発展と安定に向けた知的貢献を

■ 10周年を迎えた日中韓次世代リーダーフォーラム

国際交流基金は、2002年度から中華全国青年連合会(中国)と韓国国際交流財団との共催で、日本・中国・韓国の若手リーダーによる対話プログラム「日中韓次世代リーダーフォーラム」を、2010年度までに合計8回開催し、累計の参加者数は、日本46名、中国42名、韓国45名を数えます。

このフォーラムは、毎年、日中韓3カ国の政治、行政、ビジネス、学術、メディア、NPOの6分野から、次の世代のリーダーと目される若手知識人が、10日間の日程で寝食を共にして3カ国を旅しながら、現場視察や意見交換・討論などを行うものです。濃密な日程を共にした「仲間」として、国や立場を超えた信頼・友情関係は、フォーラム終了後も継続しています。

2012年3月28日には、本事業の10周年を記念して、今後の日中韓関係を議論する特別フォーラムを実施しました。過去に本フォーラムに参加した3カ国・29名が再集結し、政治・経済・市民社会の3つのグループに分かれて議論を重ねました。その成果は、“Vision 2030 for Northeast Asia”という提言にまとめられ、翌29日には、玄葉光一郎外務大臣に手渡されました。

■ 中東次世代リーダー招へい:「アラブの春」と東日本大震災

2012年2月19日から10日間に亘り、エジプト(6名)、ヨルダン(6名)、チュニジア(4名)の若手リーダーを日本に招へいし、「国づくり・地域づくりにおけるリーダーシップ」をテーマにグループ研修を実施しました。参加者は、若手研究者、政府関係者、ジャーナリスト、NGO職員等さまざまな分野で活躍している求心力や発信力を有する次世代のリーダーと目される若手職業人たちです。

2010年暮れから勃発した「アラブの春」と2011年に起きた東日本大震災により、期せずして両国・地域が直面する

ことになった「社会復興」という問題を「リーダーシップのあり方」という大きな視点に、「コミュニティ再生」、「若者の農業帰帰」、「障害者就労」等の具体的テーマから切りこんでいきました。日本とアラブの双方の次世代のリーダー達は、レクチャー、ワークショップ、地方視察等を通じて互いの活動状況に耳を傾け熱のこもった意見交換を行いました。

■ 仮設住宅に描かれた希望の壁画

東日本大震災で被災した人のための仮設住宅「トゥモロービジネスタウン」(宮城県石巻市)で、2011年12月と2012年4月の2回にわたり、日系ブラジル人アーティストのチチ・フリーク氏を招き、仮設住宅にカラフルな壁画(グラフィティ)を描くプロジェクトを行いました。

応急的に設置されるという性格上、仮設住宅の外見は無機的・没個性であり、また被災を契機に異なる居住地から同じ仮設住宅に入居したことから、コミュニティとしての人間関係もまだ新しくスタートしたばかり。そんな状況のもと、グラフィティ・アートは「住まい」に彩りを添えるだけでなく、それぞれの棟の住民ごとにどんな絵を描いてもらうかを話し合うことで、住民同士の会話のきっかけをつくる役割を果たしました。

棟ごとに異なるモチーフで描かれた壁画は、画一的な仮設住宅に「アイデンティティ(個性)」を与えました。また壁画の制作過程でアーティストと、また住民同士で繰り広げられる世間話が近所付き合いのきっかけになり、これまで住民同士のつながりが薄かった仮設住宅に、たくさんのコミュニケーションと笑顔が生まれました。仮設住宅に出現した大きな絵は、そこに住む皆さんの誇りとなり、現在も希望の糧となっています。



[左] 日中韓次世代リーダーフォーラムの記者会見
[中] 谷根千地域(谷中・根津・千駄木エリアの総称)を舞台に、新たな「場」をつくることを通して市民社会の基盤づくりをおこなっている広石拓司氏と意見交換する中東の次世代リーダー達
[右] 石巻の仮設住宅にカラフルな壁画を描くチチ・フリーク氏 撮影:相川健一

世界が直面している共通の重要課題に 日米両国が世界の人達とともに解決を目指す

■日系アメリカ人リーダーシップ・シンポジウム

東日本大震災後の被災地で復旧・復興を支えた市民とコミュニティの強さ。それを今後の中長期的な復興と日本の再生につなげていくことはできないだろうか？ そのための鍵を求めて、2012年3月5日、「震災復興から日本再生へ：明日を拓く市民社会」と題するシンポジウムを、仙台国際センターで開催しました。

外務省は2000年より「日系アメリカ人リーダー招へいプログラム (JALD)」を毎年実施しており、国際交流基金はそれに合わせ、これまでもさまざまなテーマでシンポジウムを企画してきました。今回は、震災の発生直後から全米で復興支援活動に奔走してきたJALD参加者からの強い希望により、仙台での開催が実現しました。

シンポジウムでは、仙台で震災復興に携わるNPOや社会起業家を日本側パネリストとして招き、コミュニティ再生のために市民社会が果たす役割や日米の協力の可能性など多様なテーマについて、米国の日系人の経験と対比しながら活発な意見交換が行われ、日系アメリカ人と日本人の間で相互交流・理解の機会となりました。

■米国アジア研究専門家招へい事業

近年、中国やインドなど、アジア諸国が急速な発展を遂げて国際社会で存在感を増し、米国での日本に対する関心が相対的に低下していると言われていています。こうした状況に対応するため、新たに「米国アジア研究専門家招へい事業」を開始しました。この事業は2010年11月に行われた日米首脳会談に際して発表された「日米同盟深化のための日米交流強化」イニシアチブの一環として企画されたものです。

2011年12月に、米国においてアジア研究分野の第一線で活躍する研究者5名が来日、1週間の滞在中に、中央省庁、大学、シンクタンク、民間企業、NGOなど多くの機関を精力的に訪問しました。参加者からは米国内では知ることのできない日本の現状について、幅広い分野の関係者と率直な意見交換を行えたことは大変有意義だったとの感想が寄せられました。

日・米・アジアの間での人的ネットワークの構築と、相互理解・協力の促進を目指し、今後も継続して実施を予定しています。

■日米アジアジャーナリスト会議

日米両国の共通課題をアジアという舞台上で位置づけ、グローバルな視点とリージョナルな発想からジャーナリストが話し合うラウンド・テーブル「日米アジアジャーナリスト会議 (Common Agenda Round Table, CARTプロジェクト)」を、CART事務局、中国・上海日報社との共同事業として2011年12月4日～5日に上海で開催しました。

2回目の実施となる今回の会議では、東日本大震災後のメディアの役割と課題、APEC首脳会議や東アジアサミット後のアジア太平洋地域における外交、従来のメディアとインターネットメディアとの関係等が議題になりました。

会議には日・米・中3カ国の主要紙のジャーナリストやアジア特派員をはじめ、東南アジアやインドのジャーナリストも参加し、活発な議論が交わされました。

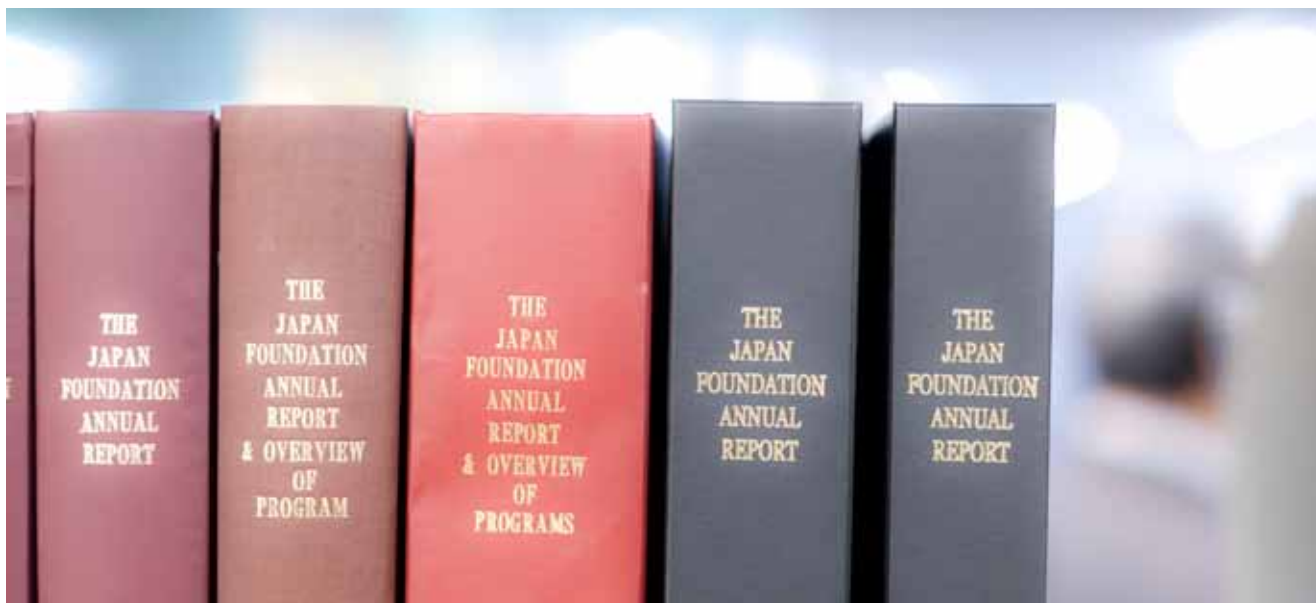
今回のプロジェクトにより、日・米・アジアのジャーナリストの間で問題意識が共有され、相互のネットワークが一層発展していくきっかけとなることが期待されます。



[上] 上海で開催された日米アジアジャーナリスト会議
[左] 仙台で開催された日系アメリカ人シンポジウム「震災復興から日本再生へ」

情報提供／国内連携

国際交流基金は主な3つの分野での事業のほかに、国内外の国際文化交流についての情報提供や、企業と連携した事業展開、国際交流について大学と共同研究を行っています。ここではそれらの活動について、そして京都支部の活動を報告します。



JFIC ライブラリー

撮影：相川健一

情報センター

ウェブマガジンの英語版を開始。シンポジウムで震災以降の世界の変化を語る

情報センターは、プレスリリースなどを発信する広報・メディアアリレーション業務を担うほか、国際文化交流についてのトピックを提供するウェブマガジン「をちこちMagazine」や年次報告書の発行、ウェブサイト、ブログ、ツイッター、メールマガジンなどによる情報発信、国内連携事業、国際交流基金賞や地球市民賞などの顕彰事業(P.8参照)、ライブラリーとイベントスペースで構成される情報発信拠点「JFIC(Japan Foundation Information Center)通称:ジェイフィック」の運営、大学生などの本部への見学・訪問受入れも担っています。

ウェブマガジン「をちこちMagazine」では、国際文化交流に関するさまざまなテーマで毎月特集を組み、2011年度は、「いま、日本語でつながる」「3.11後の社会」「クールジャパンの今」「時代と空間を越える文学」「韓国を、想う」「ドイツで北斎に出会う」などの特集記事を掲載したほか、国際交流基金事業に関わった専門家や国際交流基金職員による報告記事も多数掲載しました。また、英語版の「Wochi Kochi Magazine」も発行を開始しました。

JFICを活用したイベントも継続して実施しました。東日本大震災を受けて、国際シンポジウム「新しい世界ネットワークの可能性:文化で未来を切り開く—東北の心、アジアの声—」(共催:アサヒ・アート・フェスティバル(AAF)実行委員会)、シンポジウム「災害情報はどのように伝えられたか—多文化社会日本のメディア環境と課題—」(共催:NPO法人地球ことば村・世界言語博物館)を開催したほか、若手アーティストを対象とした「AIR! AIR! AIR! 海外でステップアップを目指せ!〈ノウハウ編〉」、在京大使館の文化担当官を対



[上] 若手アーティストを対象にした対話型セミナー「AIR! AIR! AIR!」

[左] 1930～40年代の報道写真界を牽引した名取洋之助、木村伊兵衛、土門拳らの写真家と山名文夫、河野鷹志らのグラフィックデザイナーがつくり上げたグラフィ誌『NIPPON』で構成した展示

象に震災後の日本の文化環境について情報提供を行った「カルチュラル・ミーティング・ポイント」など幅広い対象へ向けたイベントを実施しました。

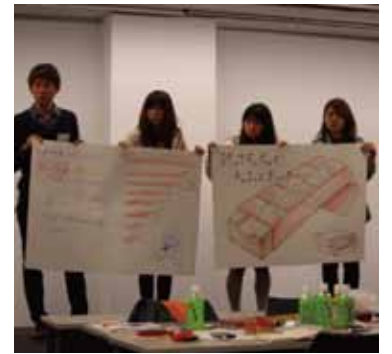
JFICライブラリーでは、国際交流基金の実施事業に関する資料や、国際文化交流・文化政策に関する図書資料、外国語で書かれた日本を紹介する図書・映像資料などを所蔵し、図書の貸出やレファレンス・サービスを行っています。所蔵する貴重本などを紹介するミニ展示を月替わりで行っていますが、2011年5月から6月には「昭和初期のグラフィックに見るNIPPON—名取洋之助・木村伊兵衛・土門拳」と題して特別展示を実施、これに合わせて公開対談「日本工房と国際文化振興会」を開催しました。

デザインを通じて海外の若者と日本の交流を促進

事業開発戦略室は、企業と連携した事業展開やデザインを通じた若者の交流事業を通じた国際交流基金の商品開発などを行っています。これまで、学生を対象とした風呂敷デザインの国際コンテストを、さまざま開催してきましたが、2011年度は、日独交流150周年(2011年)、日イスラエル外交関係樹立60周年(2012年)をそれぞれを記念して、さらにポーランドと日本の文化交流強化を企図し、ドイツ、イスラエル、ポーランドの3カ国を対象としたコンテストを開催しました。「自国と日本の融合をイメージしたもの」というテーマで応募作品のなかから、それぞれのコンテストでの最優秀賞および優秀賞の2作品を製品化しました。

2012年開催の日韓学生パッケージデザイン交流事業に向けて、事前広報と学生の意識づけを目的に日本と韓国のパッケージデザイン協会の全面協力を得て、日本と韓国で学生対象のパッケージデザインフォーラム・ワークショップを開催しました。

また、東日本大震災に際して世界中から日本に寄せられた温かい支援に対する日本人の感謝の気持ちを表し、あわせて日本の復興への決意を伝えるために、映像作品『東日本大震災の記憶-世界の絆に感謝-』を財団法人太平洋観光交流センター



[左] イスラエル・日本の学生によるふろしきデザインコンテストのポスター
[右] 日本と韓国で開催された学生対象のパッケージデザインフォーラム・ワークショップの様子

(APTEC)と共同制作し、国際交流基金の海外拠点など世界各地で上映し、災害や震災からの復興に関するシンポジウム、東北観光をテーマにする講演会などを行いました。

これら事業のほか、海外における日系企業の社会貢献活動を通じた国際文化交流の推進に資する事業も継続し、2011年度には、マレーシアでの日系企業の社会貢献活動の調査を行いました。

国際交流共同研究センター

国際交流の技法を研究し、分析・評価する

国際交流基金が青山学院大学と連携・協力して運営する国際交流共同研究センター(Joint Research Institute for International Peace and Culture)は、国際交流についての研究、活動の分析・評価ならびに国際交流技法の開発などの研究を実施し、その研究成果を広く社会に還元することにより国際交流の発展に寄与することを活動の目的としています。2011年度には、平和構築における文化の役割に関するシンポジウムや多文化共生と国際交流に関する講演会などを開催し、研究紀要『Peace and Culture』第4巻を発行しました。



2011年7月にバンコク芸術文化センターで開催された国際シンポジウム「Reflecting Conflicts Through Cultural Initiatives: Perspectives from Southeast Asia」

京都支部

関西圏の文化の担い手との連携し、国際交流を推進

京都支部は、関西圏のさまざまな国際交流の担い手とのネットワークを活かしつつ、海外からの留学生・研究者など外国人を対象とした日本文化紹介活動を推進しています。

和菓子の手づくり体験や、酒造りの工程見学、錦織物の工房訪問などの体験型プログラムや、能・狂言等の舞台公演、日本映画の上映会など外国語解説付きのプログラムを通して、日本文化に触れる機会を外国人のたたちに提供しています。「国際交流のタベ——能と狂言の会」は1974年から実施し、2011年度で第38回目を迎え、会場は約420名の来場者で埋め尽くされました。

また、国際交流基金が招へいする日本研究者による講演会、セミナー、懇談会などを通じて、国際交流に関心をもつ市民との対話や交流を進めています。2011年度は、アレックス・ベイ

ツ氏(米国)による「災害と文学：関東大震災」についての講演会等を実施しました。



[左] 能「雪」 金剛永謹師 [右] 狂言「鎌腹」 茂山千五郎師(右) 2点とも撮影：高橋章夫

国・地域別の取り組みと海外拠点の活動

国際交流基金では、政府の外交活動や国際情勢の変化を踏まえながら、国・地域別方針を策定しつつ事業を実施しています。また、21カ国に22の拠点を設けており、その国・地域の状況に合わせ、文化芸術から日本語教育、日本研究や知的交流の各分野でさまざまな交流活動を展開しています。



東日本大震災の犠牲者を追悼するため被災地10カ所で同時に花火を打ち上げるプロジェクト「LIGHT UP NIPPON」。2012年3月11日、インド・ニューデリーでこのプロジェクトを紹介。集まったインドの人の多くが追悼の祈りを捧げてくれた。撮影：aki

2011年度 国・地域別の取り組みについて

2011年度においては、インドにおける主要都市向け戦略的文化集中発信プロジェクト、アジア・大洋州地域との人物交流を促進する21世紀東アジア青少年大交流計画(JENESYS Programme)、「日独交流150周年」「日本クウェート国交樹立50周年」をはじめとする大型周年事業への協力などの重点的的事业を展開しました。

■主要都市向け戦略的文化集中発信プロジェクト

日本との外交関係上重要な国の主要都市で、現地の文化芸術機関等と協力しながら文化発信事業を集中的に展開し、日本人および現代日本社会のもつ価値や魅力を示し、対日理解の向上、深化をはかるプロジェクトです。2011年度はインドとの国交樹立60周年を迎える2012年1月から3月にかけて、「India-Japan: Passage to the Next Generation」と題して、インド各地で20件以上の日印交流文化イベントを実施しました。2012年3月11日、インドのニューデリーで、ドキュメンタリー映画「LIGHT UP NIPPON」の上映とシンポジウムを行い、東日本大震災犠牲者を追悼する行事も行われました。

■21世紀東アジア青少年大交流計画(JENESYS Programme)

「21世紀東アジア青少年大交流計画プログラム(JENESYS Programme)」は、アジアの強固な連帯の基礎を強化することを目的として、2007年からの5年間で大規模な青少年交流事業を実施する事業です。対象はEAS(東アジア首脳会議)参加国(ASEAN、中国、韓国、インド、豪州、ニュージーランド)を中心とするアジア・大洋州の諸国。国際交流基金はこの事業の一翼を担い、最終年度となる2011年度は日本語教師や日本語学習者の招へい、若手知識人や実務家、若手の芸術家・デザイナーの招へい事業など、将来、各分野でリーダーとしての活躍が期待される人材の育成をめざした交流事業を行いました(P.42、P.47参照)。

■大型周年事業への協力

2011年は「日独交流150周年」「日本クウェート国交樹立50周年」を記念して、官民を挙げて数多くの文化交流事業が行われました。国際交流基金はこれらの周年事業に積極的に参加し幅広く日本文化を紹介しました(P.35参照)。

文化芸術、日本語、シンポジウムなど 多彩な日独交流 150周年 記念事業を展開

2011年は1861年に日本とプロイセンの間で修好通商条約が締結されて150年目にあたり、日独でさまざまな記念事業が開催されました。ケルン日本文化会館もドイツ各地の在外公館や文化機関と連携して、多くの事業を実施しました。東日本大震災の影響で一部の事業に中断があったものの、復興支援につながる新しいプロジェクトも生まれ、両国の絆を深めることができました。文化芸術分野の中心的事業がマルティン・グロピウス・バウ（ベルリン）で開催した北斎展で、ドイツ初の大規模な北斎展は注目を集め、9万人余が入場しました。黒澤明監督特集を当館のほか、ベルリン、ミュンヘン、デュッセルドルフ、フランクフルト、ニュルンベルク、ハンブルクの映画館と連携して開催し、計13,549人が鑑賞しました。館内でも琉球舞踊公演、からくり人形レクチャー・デモンストレーション、ジャズコンサート、ブックデザイン展など、多様な事業を行いました。



ケルン日本文化会館で行なわれた琉球舞踊公演 [左] とブックデザイン展 [右]

当館の日本語講座は、初～上級までの各講座、テーマ別講座や日本人ボランティアと語り合う「日本語しゃべり〜れん」、日本文化体験講座等で、受講者数はのべ1千人を越え、また日本語教師研修会を3回主催し、各地の教師会開催の研修に当館から専門家が講師として参加しました。

日本研究・知的交流分野では9月にケルン大学との共同で、日本の16大学の学長を招き日独学术交流150周年記念シンポジウム「変転する世界における伝統的な研究社会」を開催。また、ベルリン日独センターでの「東日本大震災と新旧メディアの役割」、デュースブルク大学での「東日本大震災後の日本の政治と社会政策」、ミュンヘン大学での「大惨事が聳唳教育に及ぼす影響」等のシンポジウムに協力。当館でも震災から一年を経た3月12日、追悼とドイツからの支援に感謝する催しを、ノルトライン・ヴェストファーレン州やケルン市の代表者の出席を得て開催しました。

国交樹立60周年を記念した 現代の日本文化を紹介する 事業が大盛況

インドと日本は仏教伝来以来、長い交流の歴史があり、1952年の国交樹立後も友好的にパートナーシップを築いてきました。2012年は国交樹立60周年にあたり、1月から3月にかけて、「India- Japan: Passage to the Next Generation」のテーマのもと、デリーを中心に20件以上の日印交流文化事業を展開しました。伝統文化の紹介のみならず、アニメワークショップ、若手アーティストによる現代美術展や日印共同制作の演劇公演、映画上映など多岐にわたる事業を通じて、伝統的な日本文化を中心に築きあげられてきたこれまでの関係をより強いものへと発展させると同時に、日常的に触れる機会の少ない現代日本の新しい姿をさまざまな角度から見せ、より多くの人びとに日本文化の多様な魅力を感じてもらえる機会を提供しました。

2012年2月25日から3月4日にかけて開催された第20回ニューデリー国際図書展では、英語に翻訳された最新のマ



ニューデリー国際図書展での「マンガ・カフェ」の会場

ンガ500冊以上を揃えた「マンガ・カフェ」を出展、これほどのマンガ本が一堂に集まるのはインド初で、日を追うごとに来場者数が増え続け、最終的に9日間で延べ1万2千人以上が来場しました。日本のマンガやアニメが人気といっても、インターネットの世界で知っている人がほとんどなのが実情であり、一般の人が気軽に日本のマンガ本を手にとって触れることができる機会は皆無に等しいインドにおいて、英語に翻訳され、内容が理解しやすかったことも後押しし、インドの人達にとって今回のマンガ・カフェは非常に貴重な機会だったようです。

東南アジアに比べ、現代の日本文化情報に触れる機会が、まだ日常的に少ないインドですが、それらの情報に対し高い関心をもつ人が潜在的に多数存在することもわかりました。今後もそれらのニーズにこたえられるよう、多様な日本文化を実際に体験できる機会を提供していきます。

音楽の絆が 中国と日本の 心と心をつなぐ



河口恭吾さんの迫力あるステージ

ふれあいの場「心連心」巡回コンサートを2011年10月に実施しました。日中両国で活躍中の歌手aminさん、圧倒的な歌唱力とパフォーマンスが魅力の河口恭吾さんがコンビを組み、北京、青島(山東省)、成都(四川省)、西寧(青海省)の4都市を駆け回りました。現地のファンや日本語学習者のために、十数曲を披露。日中両言語を巧みに使用したトークや曲あてクイズなど趣向を凝らした演出で各会場が盛り上がりました。このツアーは延べ3,450名を動員。ポピュラー音楽を「絆」とし、中日双方の人びとが「心と心をつなぐ」事業になりました。広い国土と巨大な人口を擁する中国は、北京、上海といった大都市が存在する一方、西寧のように、海外との交流の機会が限られた都市も多数存在します。それらの都市でも日本語を学び、日本に関心を持っている人がいます。地方都市への展開という点でも、このツアーは高い評価を得ることができました。2012年は日中国交正常化40周年にあたります。当センターも日中間の文化交流を更に盛り上げていきたいと考えています。

日伊の建築・ 防災関係者が 震災復興に関する 知見を共有



討論会では多くの事例を参照しながら活発な議論が行われた

「災害復興期の都市計画とコミュニティ・デザイン」をテーマにした討議会(ラウンドテーブル・ディスカッション)を2012年2月にジャカルタで開催しました。この討論会に建築家による東日本大震災復興支援のネットワーク<アーキエイド>の設立発起人のひとり小野田泰明・東北大学教授を招き、災害復興に関与経験をもつインドネシアの行政官、研究者、NGO職員、建築家、ジャーナリストら約30名が参加、活発な討議が行なわれました。復興過程における政府部門の権限やガバナンスのあり方、経済水準や予算の大小、コミュニティのありようなど、日本とインドネシアでは外部環境が違う点も多くありながら、地域の再生に臨む姿勢には数多くの共通点があること、特に多様なステイクホルダーの意見・利害を集約して都市やコミュニティのデザインを行なっていくためには、住民・行政・土木工学専門家・建築家・民間企業や投資家などが協調して復興に取り組むことが重要であるなど、自然災害の多い日本とインドネシアが互いの事例を通して、多くを学ぶ機会となりました。

グローバル化のなかで 都市のあり方を ともに考える



ソウルで開催されたシンポジウム

2011年8月、ソウルで「日韓欧多文化共生都市シンポジウム」を開催しました。外国人定住者の増加による文化的多様性を都市の活力・成長の資産として活かす「インターカルチュラル・シティ」の政策が欧州で広まっており、その取組みに学び、日本や韓国の都市のあるべき姿を探るものです。日韓、そして欧州の研究者・政治家・実務者が集まったシンポジウムは、その後、日韓欧9自治体の首長らが参加する「日韓欧多文化共生都市サミット」(2012年1月・東京)に発展、さらに第2回サミット(2012年10月・浜松市)の開催決定など、参加都市や協力機関を増やしながらかつて継続的に開催される動きを生み出しました。国際交流基金は、日韓交流事業を中長期的に強化する「日韓文化交流5か年計画」を定め、第2次計画を2011年度からスタート。重点事項のひとつの「共通課題解決のための共同作業」の取り組みとして、多文化共生のほか、災害復興、エネルギー、社会的企業、高齢化社会、青少年教育をテーマにした交流事業を実施しました。両国が共通に抱える課題の解決策を探っていきます。

アンドロイド 「ジェミノイドF」が タイ人女優と競演



「ジェミノイド」(左)とタイの女優が共演 ©THE NATION

2012年3月、日本を代表する劇作家・演出家の平田オリザ氏とロボット研究の第一人者である石黒浩氏(大阪大学)が共同で進めるロボット演劇の最新作、アンドロイド演劇「さようなら」をバンコクのチュラロンコン大学で上演しました。人間そっくりのアンドロイド「ジェミノイドF」と人間俳優が共演する先端的な作品で、台本は日本語を学ぶタイ人学生を対象とした翻訳コンペティションで選出した最優秀作を採用し、共演者にタイ人女優を起用。本作品は2010年の愛知での初演以降、欧州各国で上演され話題を呼びましたが、日本以外のアジアではタイが初演、さらに現地の女優を起用し現地語で作るコラボレーション型の上演としては、この公演が世界で初となりました。全10回の公演はほぼ満席で、演劇関係者・工学系の学生・日本語学習者まで幅広い層の約3千名が観劇。新聞の一面を2度飾ったほか、地上波・衛星テレビでも報道されました。平田氏のワークショップや石黒氏の講演会もあわせて実施し、この事業全体を通じ日タイの関係者間に大きな絆が生まれました。

スラムやストリートに 生きる若者を 日仏独のヒップホップ・ アーティストが支援



各国のアーティストがフィリピンのヒップホップ・アーティストを囲んで楽曲を制作

マニラ日本文化センターは、ドイツおよびフランスの文化交流機関である、ゲーテ・インスティトゥート、アリアンス・フランセーズとともに、日本、フィリピン、フランス、ドイツのヒップホップ・アーティストを招いて、スラムで生活する若者やストリートチルドレンを対象とした、ラップ創作やストリートダンスのワークショップと公演を実施しました。若者に人気の音楽やダンスを通じ、夢や希望を表現することの大切さを伝えることを目的に企画した事業でしたが、日仏独のアーティストからの一方的な技術指導に留まらず、共同制作を通じたフィリピンを含む各国のアーティスト間のネットワーク形成や相互理解の促進、フィリピン人アーティストの技術レベル向上支援、ワークショップに参加した若者達の表現力・創造性の育成といった、複合的な成果を生むことができました。事業終了後も、ソーシャルメディアなどを通じてアーティストとワークショップ参加者との交流は続き、この事業を契機に芽生えた国を越えた絆がさらに深まるよう、今後も支援を継続していきます。

日越ロックの競演 震災復興を願い 力強いエール



ベトナムの人気バンド、Ngu Cungのステージ
撮影：Aidan Dockey

東日本大震災後、日本に対して「若さ」「元気」「躍動感」等のイメージは失われる傾向にありましたが、その回復を目指し、ベトナム日本文化交流センターでは、日本とベトナムのロックバンドが競演する「Go! Go! Japan!」ロックコンサートを開催しました。日本からは、メンバー全員が20歳前後という超若手ながら人気急上昇中のロックバンドOKAMOTO'S、世界各国のロックフェスに引っ張りだこのElectric Eel Shock、ベトナム公演2度目となるMOLICEの3バンドが、ベトナムからは、Ngu Cung、そしてRosewoodという国を代表する二大ロックバンドが参加し、約5時間にわたって熱いライブを繰り広げました。ライブのオープニングでは、『東日本大震災の記憶 世界の絆へ感謝』（国際交流基金制作）のダイジェスト版も上映。震災後、復旧・復興を続ける日本の姿を紹介しました。この日のライブを締めくくったのは、OKAMOTO'Sの掛け声に合わせて「Go! Go! Japan!」の大合唱。一日も早い復興を願って、ベトナムから日本へ向けて、力強いエールが送られました。

初級講座や 教室増設で 日本語学習の 機会を拡充



新たに開設した日本語教室用スペース

クアラルンプール日本文化センターでは、日本語講座拡充の一環として、JF日本語教育スタンダード準拠教材『まるごと 日本のことばと文化（試用版）』を用いた初級レベル講座を2011年10月から新たに開始しました。受講者からは、「グループ単位の活動が多く、日本語を話すチャンスが多かった。グループの仲間からも刺激を受けた」「受講期間を通じてポートフォリオ（自分の学習過程や言語的・文化的体験を記録していくファイル）を作成した結果、言語と文化と一緒に勉強してきたことが実感できた」といった声が寄せられました。

さらに2012年3月には、今後の日本語講座のさらなる拡充に対応するため、当センターに近い場所に日本語教室用スペースを増設しました。隣接する商業施設からアクセスが容易な同スペースには、ミニギャラリーも併設しています。今後、事業と連動した展示や日本の季節を感じられるような展示を行い、より多くの人に日本文化・日本語を体験していただける情報発信スペースとして活用していく予定です。

恒例の日本映画祭が 15周年 7都市の開催で 2万2千人を動員



シドニー会場での竹野内豊氏
© 2011 Japanese Film Festival in Sydney

「楽しい！感動する！癒される！映画祭」をテーマにした恒例の日本映画祭は、2011年で第15回を迎え、シドニー、メルボルン、キャンベラ、パース、プリズベン、ホバート、アデレードの主要都市を巡回しました。15周年を祝し、ジュリア・ギラード首相をはじめ、シドニーやメルボルンの各市長からも祝福メッセージが寄せられるなど注目を集め、過去最大の計約2万2千人の観客を動員。シドニーで30作品、メルボルンで35作品の日本の最新話題作を上映しました。なかでも、震災関連プログラムとして新潟中越地震のドキュメンタリー『1000年の山古志』と、阪神淡路大震災のその後を描いた『その街のこども』の上映では、監督、プロデューサー、撮影監督等を日本から招き、ファイナンシャルレビュー紙副編集長をモデレーターに迎えたパネルディスカッションを実施。ここにも大きな関心が寄せられました。また、シドニー会場では『太平洋の奇跡』の平山秀幸監督と主演の竹野内豊氏がゲスト参加、満員の会場が総立ちになる大盛況でした。

大規模な 日本特別展を 首都圏で開催 12万人が来場



からくり人形のデモンストレーション
写真提供: Bits Box Inc.

2011年5月より、半年におよぶ大規模な日本特別展「JAPAN: Tradition, Innovation(伝統と革新の国、日本)」が、首都オタワのカナダ文明博物館をメイン会場として開催されました。「温故知新」をテーマに、日本の現代デザインや技術とその歴史的ルーツを多彩な展示で表現。からくり人形から二足歩行ロボット「アシモ」やインダストリアルデザインへの系譜、江戸のキモノの美や屏風絵から会場の大壁面にリアルタイムで描かれるポップカルチャーへのつながり、さらに古典曲と現代曲を組み合わせた邦楽公演、夜間の屋外アニメ上映など、日本文化の伝統と革新性、多彩な魅力を紹介し、会期中12万人を超える入場者を得ました。10年間の構想・準備を経たこの複合的事業は、日本の文化専門機関と日本企業との連携、日加交流の関係者の支援により結実したのものとしても注目されました。また、からくり人形デモンストレーション、アニメ・映画上映会、邦楽公演等の一部プログラムは、モントリオール、トロント、カルガリー、バンクーバーにも巡回し、カナダ全域を対象に効率的な事業展開が目指されました。

日系人の多い地域で 日本語教育の 充実をはかる 新講座をスタート



日本語講座に集まった受講生達。楽しそうに学ぶ姿が印象的

2012年1月に新しく日本語講座「JF Nihongo」が始まりました。ひらがな・カタカナを書けるようになることを目指す「Mastering Kana」、日常のいろいろな場面に適した日本語が使いこなせることを目指す「Everyday Japanese」、ビジネスで日本語が使えるようになることを目指す「Business Japanese」など、国際交流基金がこれまで開発してきた「JF日本語教育スタンダード」に基づき、学習者のニーズに合った日本語を学べるクラスが提供されるようになりました。日系人コミュニティが築いた歴史的地区であるリトル東京に位置する教室には、多民族社会のロサンゼルスならではの多様な受講生が集まります。エスニシティ、年齢、職業、学習目的はさまざまですが、日本語学習に寄せる情熱は共通で、熱心に、また楽しそうに毎週クラスに通う受講者のようすが見られます。小さな教室ひとつですが、2012年冬季コースが終了した後も、次のコースを心待ちにする受講生の声が寄せられ、期待に応えるべく、講師たちは新しいコースの開講準備に追われています。

歴史を振り返りつつ 未来に向けた強固な 日米関係のために



大駱駝鑑の向雲太郎らによる「耳なし芳一」公演より
撮影: GION

ワシントンD.C.ポトマック河畔に毎年咲く桜は1912年に日本から米国に寄贈されたもの。その桜寄贈100周年を記念し、日本独自の舞踊スタイル「舞踏」と薩摩琵琶、サズ(トルコ等で一般的な弦楽器)の演奏、語りによる舞台「耳なし芳一」公演、和菓子の紹介等、多彩な日本文化紹介事業を実施。また東日本大震災の復興事業として、国連総会議場で神楽や和太鼓の特別公演を実施しました。さらに米国で活躍する日本人アーティスト4組を中南米の7カ国8都市に派遣しました。知的交流の分野では、金融危機、気候変動等、世界が直面する課題に加え、震災復興や防災に取り組む日米共同研究や交流を支援。また、日米関係を担う人材育成のために、米国の大学生や国際関係専攻大学院生、中堅若手の日本専門家、米国内の対アジア世論形成に影響力をもつ専門家の訪日招へい事業を実施。日米交流の核となる日米協会の基盤強化等、草の根レベルで対日理解を進める事業を行いました。これら事業を通し、日米交流がさらに発展し、次の100年への歩みが進むことを願っています。

花火に鎮魂の 想いを込めて語り合う 共通体験としての 震災



イベント最後に着火された鎮魂の花火

東日本大震災から1年となる2012年3月10日、メキシコ日本文化センターでは、ドキュメンタリー映像の上映、建築専門家による講演、鎮魂の祈りを込めた花火で構成されるメモリアル事業を行いました。被災地での外国人ボランティアと地元の人びとの交流を描いたドキュメント映像『東日本大震災の記憶 世界の絆へ感謝』を上映した後、自身も被災した建築家の若林秀和氏と、メキシコから被災地に調査に向いたロペス・オスカル氏が、被災地の写真を交えながら「自然災害と建築」をテーマに講演を行いました。メキシコでは1985年に大地震による大きな被害があり、2011年も地震が頻発したことから、来場者から積極的な質問がありました。追悼と復興を祈る花火を被災地10カ所と同時に打ち上げたプロジェクト「Light Up Nippon」のドキュメンタリー映像を上映した後、イベントの最後は伝統的なメキシコの花火「トリート」に点火。参加者全員で鎮魂の想いを共有しました。上映会に入りきれなかった人もいましたが、花火の瞬間まで待ち、被災地の復興をいっしょに祈ってくれました。

震災関連事業を契機に 日本とブラジルの連帯を深める



グラフィティアーティスト、チチ・フリーク氏の講演

震災から1年後の2012年3月、日伯友好連帯月間として、在サンパウロ日本総領事館と協力し、震災関連事業を行いました。サンパウロ州政府の協力のもと、復興に向けた歩みを撮影した写真展をサンパウロ州政庁内で実施しました。また、仙台在住の蕎麦職人、森浩一氏を招いた被災地の郷土食文化のレクチャー・デモンストレーション、震災チャリティー公演「Gambare Japão」に参加したアーティスト達による、和太鼓とブラジルの打楽器の公演やワークショップ、サンパウロ国際ドキュメンタリー映画祭での追悼と復興を祈る花火を打ち上げた「Light Up Nippon」プロジェクトのドキュメンタリー映像上映、ブラジル日本文化福祉協会での震災復興関連の映像上映会も実施。さらに石巻市の仮設住宅にグラフィティを描く活動を行ったブラジル人アーティスト、チチ・フリーク氏の講演や震災に関する映像上映会をサンパウロとクリチバで実施。これら事業を通し、日本からブラジルへ感謝の気持ちを伝え、日伯の連帯がより深まると同時に、それらが被災地を勇気づける一助になればと願っています。

フランス最大の書籍見本市「サロン・ド・リーブル」で日本が招待国に



日本からの招待作家を迎えた「ポスト3.11の日本文学」

2012年3月、パリ国際ブックフェア「サロン・ド・リーブル2012」に参加しました。今回は、日本が招待国として大きく特集されたこともあり、日本書籍出版協会、フランス国立書籍センター等と連携し、日本からの招待作家20名とともに、ブックフェア会場内外で多くのイベントに参画しました。1月の記者会見を皮切りに、会期中の3月17日には招待作家のうち4名（江國香織氏、平野啓一郎氏、堀江敏幸氏、綿矢りさ氏）を迎え、ラウンドテーブル「ポスト3.11の日本文学」を開催。震災後の作家にとっての「書く」行為の意味、震災が日本文学に与える影響、文学と日本語の問題など、示唆に富む議論が展開されました。3月22日、南仏のエクサンプロバンスでは、同市メディアテックとの共催で同じく招待作家の角田光代氏講演会を開催。日本の現代小説に関心をもつ聴衆を魅了しました。パリ国際ブックフェアは4日間の開催で前年度比5%増の約19万人を集め、成功裡に幕を閉じました。現代小説のありようをフランスで分かち合えた今回のフェア。今後も文学を通じた日仏交流を続けていきたいと思えます。

幅広い年齢層に向けて 異なる切り口で多彩な事業を展開



茶の湯を紹介するイベントから
撮影：Mario Boccia

今年度は幅広い世代に向け、多彩な切り口で日本文化を紹介しました。当会館所蔵の作品展や日本庭園の写真展では日本の伝統的な美を、「戦後日本の変容」展や「胤・独楽」展では日本人の生活風景を、東日本大震災から1年を経た2012年3月には、写真展「東北-風土・人・暮らし」で本来の東北の姿を紹介しました。また、伊語字幕付きの日本映画の新作上映会や日本アート・シアター・ギルド特集など、親しみやすい映像から芸術性の高い作品まで、質の高い日本映画を幅広く上映しました。舞台芸術では琉球古典舞踊と伝統音楽の公演が特に注目を集めた他、クラシックや、映像と音楽のコラボなどの多様な音楽公演も実施。さらにイタリア出身の国際交流基金元フェローらを講師に、年間を通じて、文学、建築、能など多岐にわたる講演会を実施しました。日本語講座は、初級～上級まで全レベルのクラスを開講、夜間や土曜、夏期集中コースも実施し、年間延べ受講者数は600名近くに。また、イタリア北部の2高校に対し、日本語教材の購入支援を行いました。

芸術事業を通して現代社会の問題を提起



上映後のトークセッションでの周防正行監督

英国では政治や社会問題を主題とした芸術作品が多数発表されることから、本年度は日本の現代社会の問題にアプローチした作品や作家に注目した事業を中心に据えました。日本映画特集上映の一環として、ロンドンを代表する複合芸術施設 ICA で、映画監督の周防正行氏と坂口香津美氏を招いて、日本の司法制度に疑問を投げかけた秀作『それでもボクはやってない』（周防監督）と、性犯罪被害者を描いた『ネムリユスリカ』（坂口監督）を上映。その後、両監督との質疑応答の場を設け、特に周防監督に対しては、英国の弁護士から専門性の高い質問が出るなど、映画鑑賞の域を超えた交流の場が創出されました。また、前田司郎氏の戯曲「迷子になるわ」のリーディングを英国人の演出家と俳優を起用して行い、東京で暮らす現代の若者の迷いはロンドンの都市生活にも繋がるのと共感の声を得ました。その他、アートを社会変革の観点から扱った展覧会の支援や東日本大震災後の芸術活動を検証する南島宏氏（女子美術大学教授）の講演を実施。英国市民との意見交換の機会を提供しました。

成熟する カサ・アジアとの 協力体制



バルセロナ、ランプラス通りで行った
Pe'zのライブ

開所2年目を迎えた当センターは、今年度、展覧会、コンサート、ダンスフェスティバルへの参加など、事業の幅と規模を広げ、事業数および観客動員数ともに前年度比約2倍という成果をあげました。事業成功の秘訣のひとつにカサ・アジアとの協力体制が挙げられます。同団体はスペインとアジア太平洋諸国の関係強化を目的に設立された公益団体で、当センター設立準備段階から協力関係にありました。カサ・アジア本部がバルセロナにあるため、特に同地での事業展開では頼もしいパートナーです。ロックバンドPe'z公演、巡回展「日本人とキャラクター」、マンガやゲームなどアジアのデジタル・コンテンツのフェスティバル「Asia Geek」、震災ドキュメンタリー映画特集など、主要事業の多くを共催し、その他の事業でも相互に広報協力を行いました。JF日本語教育スタンダードに準拠した日本語講座も2011年10月に共同開講し、順調に受講者を増やしています。今後もカサ・アジアとの良好な関係を保ちながらスペインでの文化交流事業を展開していきたいと考えています。

ロシアと 被災地を結んだ 黒森神楽



公演は多くのロシアのメディアで紹介された

東日本大震災で最も甚大な被災地のひとつである岩手県宮古市に伝わる黒森神楽の公演が2011年10月2日、3日にモスクワと近郊都市ゼレノグラードで行われました。震災発生3日後に160名の救援チームを派遣するなど、ロシアから寄せられた多大な支援に感謝の気持ちを伝え、力強く復興に向かう日本人の姿を見せるべく、モスクワ公演にはロシア政府や震災後のチャリティー事業の関係者などを含む多くの人が招待されました。歴史と伝統、力強さと軽妙さなど、民族芸能の魅力をあますところなく凝縮した黒森神楽は両会場とも大人気を博し、観客からの延々と続く拍手を受けて急遽アンコールを行うなど、大成功のうちに終了しました。レセプションで挨拶に立ったロシア非常事態省救援チームの方が、震災時の日本人の勇気に今も感動を覚えると発言するなど、日露の絆を強める催しになりました。本公演はロシアの国家賞「銀の弓射手」賞で上位8位入賞を果たしました。黒森神楽が多くのロシアの人達を感動させたことが、被災地の方々にとっても励みになればと願っています。

ハンガリー初の 本格的な 日本語教科書 『できる1』



刊行された『できる1』と「美しいハンガリーの本」コンテスト賞状

ハンガリー人のための日本語教材『できる』第1冊目を2011年8月に刊行しました。この教科書開発は、当地の日本語教育振興のため日本企業12社からの民間資金を得て発足した「日本・ハンガリー協力フォーラム事業」の一環で、ハンガリー日本語教師会と協力し、2007年から進めてきたものです。『できる』は中等教育以上の学習者を対象とした言語熟達度を示す客観的な基準「CEFR」をもとに構成されています。CEFRに準拠した日本語教科書の開発は欧州でも新しい試みで、欧州内外の日本語教育界から注目が集まっています。教科書は日本の社会・文化に関する知識、イラストや写真を随所に盛り込み、日本語習得にとどまらず、異文化間相互理解を促進する内容です。この『できる1』はデザインの美しさと、ハンガリー初の本格的日本語教材である点が評価され、2012年6月、名誉ある「美しいハンガリーの本」コンテスト教科書部門で最高賞を受賞。ハンガリーの日本語教育現場でも導入が始まっているこの教材とともに、今後もハンガリーでの日本語教育発展に努めていきます。

ポップカルチャー からはじまる 日本文化への関心

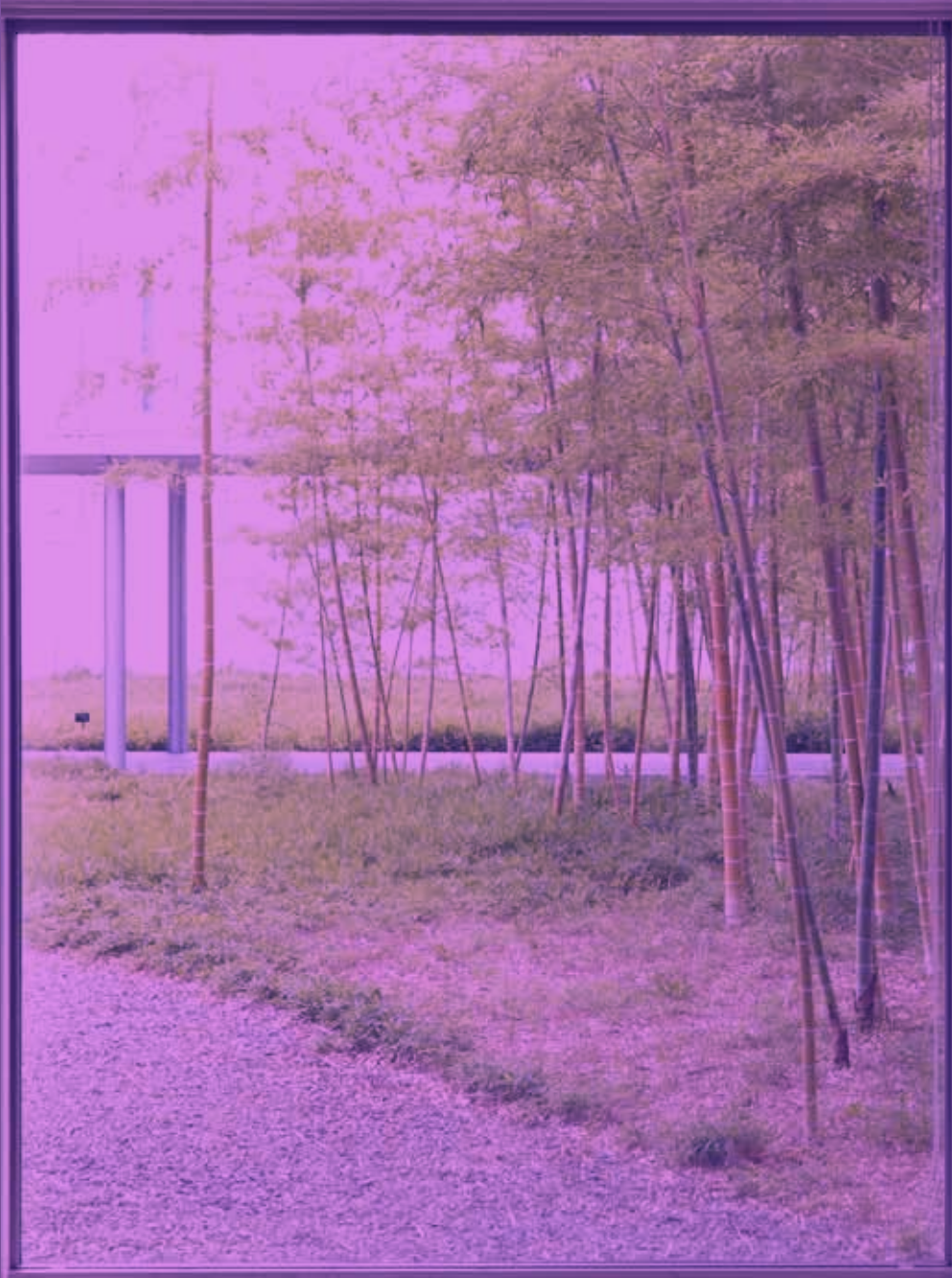


細萱敦氏の講演会に自作マンガをもって
集まった参加者

エジプトでは2011年1月に革命が起き、激動の1年でした。その状況下でも当センターは新たな国づくりを担う若者をターゲットに、日本のポップカルチャーを紹介する事業を展開。10月には現代日本文化を発信・体験できる場とすべく、センター内図書館をリニューアル。千冊を超えるマンガやCD、アニメのDVDを取り揃え、ゲーム体験コーナーやJ-POPビデオ鑑賞コーナーを設置し、毎月テーマを変えて講演会やワークショップ、映画会等を実施するなど、現代日本に関心を持つ人達に交流の場を提供しています。なかでも2012年3月、細萱敦氏（マンガ研究者・東京工芸大准教授）による日本のマンガの講演会とワークショップは、自作マンガ作品を持った若者たちが指導を求めてつめかけなど熱気に満ちたものになり、その後、国際漫画賞への応募やマンガ雑誌の発行を目指し、マンガ制作愛好家グループが結成されるなど、自主的な文化活動の契機となりました。民主化へと前進するエジプトの状況を見据えながら、将来に資する文化交流を手がけていきたいと考えています。

資料

Appendix



1—国際展

第54回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展に日本側主催者として参加しました(コミッショナー:植松由佳、出品作家:束茅)。

2—海外展

主催……企画展:12件(15カ国21都市) 巡回展:114件(67カ国114都市)

助成……海外展:60件(29カ国) 市民青少年美術交流:4件(4カ国)

海外の美術館などとの共催により、以下をはじめとする、さまざまな展覧会を実施しました。

●「新次元 マンガ表現の現在」展(フィリピン、ベトナム)／杉戸洋展: paintings and sketches(シンガポール)／「昭和40年会: We are Boys!」展(ウクライナ、ドイツ)／「田中敦子—アート・オブ・コネクティング」展(スペイン、英国 P.12参照)／平泉写真展「平泉—仏国土(浄土)を現す建築・庭園」(フランス、ベルギー)／北斎展(ドイツ P.12参照)／第26回サウジアラビア伝統と文化の国民祭典(ジャナドリア祭)日本館展示「武道の精神」展(サウジアラビア P.13参照)など

○基金所蔵品による世界巡回展

海外の美術館等との共催で、伝統工芸から日本人形、キャラクター、プロダクトデザイン、写真、現代美術など多種多様な基金巡回展を世界各地で実施しました。特に東日本大震災から1年という節目に、古代からの営みである東北の手仕事の美しさを紹介する「美しい東北の手仕事」、東北にゆかりのある個性豊かな写真家の視点を通して奥深い東北の魅力を紹介する「東北—風土・人・くらし」、震災発生直後から今日までに各地の建築家が展開している活動を紹介する「3.11—東日本大震災の直後、建築家はどうか対応したか」の新たな3つの展覧会セットの世界巡回を開始しました。[24セット114件(67カ国114都市)]

3—造形美術情報交流

国際交流のための基盤強化とネットワークづくり……8件(23カ国)

○日韓キュレーター・ミーティング…日韓の現代美術専門のキュレーター計8名が集い、グローバルな視点から美術のあり方、日韓美術交流の可能性について議論を行いました。

○学芸員交流…米国およびロシアよりキュレーターをそれぞれグループで招へいし、美術館やギャラリー、作家アトリエなど日本の美術現場の視察・訪問や日本の関係者との意見交換を行いました。

クリエイティブな分野/産業に従事する若手クリエイターを日本に招へい……16名(11カ国)

21世紀東アジア青少年大交流計画(JENESYS)プログラムの一環として、アーティスト、デザイナーなどを日本に招き、作品制作、地域との交流やネットワーク構築のための機会を提供しました。

4—海外公演

主催……23件(46カ国82都市) 助成(国内公募)……106件

以下をはじめとする海外公演を主催しました。また、海外公演助成プログラム(公募)を通じて、世界各地で行われた日本の舞台芸術の海外公演に助成を行いました。

●第26回サウジアラビア伝統と文化の国民祭典(ジャナドリア祭)日本館イベント参加公演(サウジアラビア)／心を伝える民の謡大和×沖縄民謡 南米公演(チリ、アルゼンチン、ウルグアイ P.13参照)／バルト三国邦楽公演—浅野祥 & アンサンブル(エストニア、ラトビア、リトアニア)／レナード衛藤 ブレンドラムス 東アフリカ公演(タンザニア、マラウイ、エチオピア、ジブチ)／黒森神楽ロシア公演／たいらじょう人形劇パレスチナ巡回公演／林英哲中東公演 TAIKO LEGEND-Heart Beat from Japan(カタール、アラブ首長国連邦、オマーン、バーレーン)／東北民俗芸能と鬼太鼓座 & Musicians 米仏中公演など

パフォーミングアーツ・ジャパン(PAJ)……25件(北米:12件、欧州:13件)

日本の優れた舞台芸術作品を紹介する米国、欧州の文化芸術団体向けの助成プログラム「パフォーミングアーツ・ジャパン(PAJ)」を通じて欧米で行われた舞台芸術公演・共同制作プロジェクトに助成を行いました。

5—舞台芸術情報交流

実施……9件

国内外の舞台芸術団体、プレゼンター、フェスティバル実施団体、劇場間の情報交流促進を図るため、「国際舞台芸術ミーティング in 横浜2012」や、日本の舞台芸術情報を日本語・英語のバイリンガルで発信するウェブサイト「performingarts.jp」などの事業を実施しました。

6—日本理解促進出版・翻訳

助成……57件(27カ国)

日本語で書かれた優れた図書(人文/社会科学/芸術分野)の外国語への翻訳および外国語で書かれた日本文化紹介図書の出版を支援する公募プログラムを通じ助成を行いました。

『総員玉砕せよ』(カナダ)／『我輩は猫である』(ベトナム)／『こころ』(スロベニア)／『春の雪』(ブルガリア)／『暁の寺』(ルーマニア)など

7—国際図書展

海外開催の国際図書展に共同参加……14件(14カ国14都市)

日本の出版文化の紹介と対日理解促進のために、社団法人出版文化国際交流会等と共同参加しました。

○第30回リヤド国際ブックフェア

○第63回フランクフルト国際図書展など

8—テレビ番組交流促進

日本のテレビ番組の提供……26件(21カ国)

日本のテレビ番組の海外放映を促進するため番組を提供しました。

- コスタリカ民営SPE LTDA(「すずらん」全156話)
- リトアニア国営LRT(「日本の世界文化遺産」等) など

9—ドキュメンタリー制作助成

映画とテレビ番組の制作費助成……19件(13カ国)

海外における日本理解を促進するため、魚沼市で雪国の生活を描いたドキュメンタリー映画「雪にうもれて」(Under Snow、ドイツ)など日本に関するドキュメンタリー映画とテレビ番組制作に対し助成を行いました。

10—海外日本映画祭

日本映画祭・日本映画上映会……89件(57カ国)

海外の国際映画祭での日本映画上映への助成……76件(29カ国)

活弁・演奏付き無声映画欧州巡回上映(巡回国：イタリア、フランス、ドイツ P.14 参照)、篠田正浩監督特集(メキシコ、アルゼンチン、スペイン)など、日本映画祭や日本映画の上映を在外公館・海外文化機関等と共同開催しました。さらに他団体主催の事業を助成し、上映の機会をつくりました。

11—映像・出版情報交流

- 東日本大震災復興活動・日本の若者像の海外への紹介(LIGHT UP NIPPONドキュメンタリー制作と関連事業)
- 季刊誌『Japanese Book News』(No.68~72)刊行…海外の出版社・翻訳者向けの日本の文芸の情報誌を刊行(P.14 参照)
- 日本映画データベース共同運営…ユニジャパンと共同で日本映画の基本情報をインターネットを通じて海外に提供

12—国際漫画賞・アニメ文化大使事業への協力

海外でマンガの普及啓蒙活動に貢献する新進のマンガ作家を顕彰する「国際漫画賞」(主催：国際漫画賞実行委員会)の最優秀賞受賞者と優秀賞受賞者計4名を日本に招へいするとともに、海外におけるアニメ文化大使(ドラえもん)の外国語字幕付DVDの上映会に協力しました(6カ国6都市)。

13—日本文化紹介

主催……派遣38件(64カ国98都市)、招へい2件(2カ国・14名)

助成……派遣82件(44カ国102都市)

文学、食文化、ロボット、アニメ、浮世絵木版画、建築などさま

ざまな日本の文化の専門家を世界各地に派遣し、講演、デモンストラーション、ワークショップを行いました。また、ロシアの学芸員やブラジルの舞台芸術専門家を招へいしました。

●綿矢りさ(作家 P.15 参照)／篠原久美子(劇作家)／山本彩香(琉球料理専門家 P.5 参照)／石黒浩(アンドロイド研究者)／岩見吉朗(マンガ原作者)／山村浩二(アニメーション作家)／赤坂憲雄(民俗学者 P.11 参照)など

14—文化協力

主催……派遣10件(11カ国15都市)、招へい2件(4カ国12名)、

催し2件(2カ国2都市)

助成……派遣14件(派遣13カ国14都市)、招へい1件(1カ国)

日本が有する知見や専門性を活かして、各分野の専門家の派遣や招へいを通じて、各国における文化活動を支援しました。

●国立美術館所蔵日本関係美術品調査(アゼルバイジャン P.15 参照)／日本画等修復専門家招へい研修(モンゴル、ルーマニア、ボスニア・ヘルツェゴビナ)など

15—市民青少年交流

主催……中学高校教員交流52名(12カ国)

助成……市民青少年交流事業61件

社会科、国際理解教育に携わる教員を招へいし、日本の教育、文化、社会の視察や関係者との意見公開を行う中学高校教員交流を行ったほか、市民や将来を担う青少年レベルの相互理解を深めるための事業に助成を行いました。

東アジア地域若手リーダー層招へい

21世紀東アジア青少年大交流計画(JENESYS)事業の一環として、ASEANを中心とする東アジア地域の若手リーダー層を招へいし、東アジアにおける重要な共通課題について、日本の実例を共有しつつ活発な議論が行なわれました。

①「食料問題：21世紀型の農業の在り方」13カ国24名

②「環境：環境保全と地域再生」15カ国25名

③「教育：困難を乗り越える『しなやかな力』を育む取組み」15カ国25名

16—日中交流センター

2011年度は「中国高校生長期招へい事業」として第六期生32名を招へい、また「ふれあいの場」が遼寧省大連市、浙江省杭州市に新たに開設されました。さらに「心連心ウェブサイト」上でも日中の若者の交流を促進しています。

海外における日本語教育事業概観

1—海外日本語教育機関のネットワーク形成と強化

① JFにほんごネットワーク (通称: さくらネットワーク)

海外の中核的な日本語教育機関、日本語教師会をつなぐ「JFにほんごネットワーク」は、2011年度末には42カ国2地域118機関にまで拡大しました。これらの機関によるセミナー、巡回指導、教材開発などを支援しました (P.20 参照)。

② 日本語専門家等派遣

海外における日本語教育の中核となる機関に対して、以下の通り日本語上級専門家、日本語専門家などを派遣しました。また、2012年度に派遣する日本語専門家などに対して、業務に必要な専門知識・技能に関する派遣前研修を実施しました (P.20 参照)。

- 日本語上級専門家: 26カ国38件
- 日本語シニア専門家: 1カ国1件
- 日本語専門家: 24カ国47件
- 日本語指導助手: 14カ国22件

③ 21世紀東アジア青少年大交流計画 (JENESYS) 受託事業

JENESYS プログラムの一環として受託し、大学で日本語教育を専攻した若手日本語教師を東アジア諸国に派遣しました。

- 若手日本語教師派遣: 10カ国45名

④ 日本語教育機関支援・日本語教育プロジェクト支援

海外において日本語教育の中核となる機関に助成を実施しました。

- 日本語普及活動助成: 67カ国173件

⑤ 国内連携による日本語普及支援

日本語教師養成課程を有する日本国内の大学・大学院との連携により海外日本語教育実習生 (インターン) の派遣を行いました。また、日本語教育学会が実施する海外日本語普及・日本語教育振興事業に対して助成を行いました。

- 海外日本語教育インターン: 28カ国1地域380件
- 日本語教育学会助成: 3件

2—日本語能力試験

2011年7月3日および12月4日に試験を実施し、海外61の国・地域で、約49万人が受験しました。チリ、エクアドル、オーストリアの3カ国で新たに試験を開始し、江陵 (韓国)、南通、西寧、福州 (中国)、ジョホールバル (マレーシア)、モンテレイ (メキシコ)、エディンバラ (イギリス) が新たに試験実施都市となりました (P.21 参照)。

- 第1回 (7月) 海外20の国・地域・96都市、受験者数 約21万人

- 第2回 (12月) 海外60の国・地域・196都市、受験者数 約28万人

また、『日本語能力試験公式問題集』を発行しました。N1からN5まで各1冊、計5冊に分かれており、各レベルとも試験1回分に相当する数の問題を掲載しています。問題用紙の表紙、解答用紙のサンプル、聴解の試験問題用CD、聴解試験問題のスク립ト (音声を文字にしたもの) も含まれています。

3—海外日本語講座の充実

2011年度より、一般市民を対象とした日本語講座 (通称: JF 講座) を拡充しました。「JF 日本語教育スタンダード」を取り入れた新たなカリキュラムを導入し、日本文化理解に重点をおいた授業を行っています。

2011年度には、国際交流基金の海外拠点21カ所と、ウクライナ、カザフスタンの日本センターでそれぞれJF 講座が開講され、のべ8千人が受講しました。

4—日本語国際センターにおける研修事業

海外の日本語教師を招へいし、以下の教師研修を実施しました。また、研修生と地域住民の交流など、地域のニーズに配慮した事業を併せて実施しました (P.22 参照)。

① 海外の日本語教師招へい

- 海外日本語教師長期研修: 30カ国57名
- 海外日本語教師短期研修: 41カ国127名
- 韓国高校日本語教師研修: 35名
- 中国 (大学・中等学校) 日本語教師研修: 57名
- マレーシア中等教育日本語教師研修: 6名
- 日本語教育指導者養成プログラム (修士課程 [新規]): 4カ国4名
- 日本語教育指導者養成プログラム (修士課程 [継続]): 6カ国6名
- 日本言語文化プログラム (博士課程 [継続]): 5カ国5名
- 海外日本語教師上級研修: 5カ国11名

② 21世紀東アジア青少年大交流計画 (JENESYS) 受託事業

- 東アジア若手日本語教師特別招へい研修: 10カ国45名
- 南アジア若手日本語教師特別招へい研修: 3カ国17名

③ その他の受託事業

- ロシア若手日本語教師研修: 9名
- 台湾日本語教師短期研修: 8名

④ 日本語国際センター図書館

日本語教育専門図書館として、図書・視聴覚資料47,259点、雑誌・紀要等726誌を所蔵し、情報・資料の提供を行いました(利用者数:19,666人、貸出点数:13,817点)。

5—日本語教材・教授法等開発・普及

多様な日本語学習ニーズに対応するための日本語教材や、日本語教師を支援するウェブサイトなどを開発・運営しました(P.23参照)。

○『まるごと 日本のことばと文化』試用版開発

「JF日本語教育スタンダード」に準拠したコースブックとして

『まるごと 日本のことばと文化』試用版の開発を進めました。

○「エリンが挑戦! にほんごができます。」(映像教材・ウェブサイト)

NHK教育テレビで再放送。ブラジル、スリランカ、韓国、フィンランド、インドネシア、アメリカ(ハワイ州、南カリフォルニア)、ベトナム、ラオスの8カ国、計9つのテレビ局で放送(現地語の字幕・吹替版)。また、2010年3月に公開したWEB版「エリンが挑戦! にほんごができます。」は既存の日本語、英語版に加え、スペイン語、ポルトガル語、中国語、韓国語を公開。さらにフランス語、インドネシア語の2カ国語版を追加制作しました。

○「アニメ・マンガの日本語」(ウェブサイト)

従来の英語、スペイン語、韓国語、中国語に加え、フランス語を追加、5言語すべてで13種類の全コンテンツが利用できるようになり、開発を終了しました。アクセス件数は240万件。

○「NIHONGO eな」(ウェブサイト)

日本語学習に役立つウェブサイトやツールを紹介するポータルサイトを運営。英語と日本語に加え、一部のコンテンツは中国語と韓国語でも提供しています。アクセス件数は102万件。

○「みんなの教材サイト」(ウェブサイト)

コミュニティ機能および管理機能を拡充、教材用素材を追加しました。アクセス件数は約400万件。

○JF日本語教育スタンダード普及活動

J-GAP(日本語グローバル・アーティキュレーション・プロジェクト)会議を2件実施。日本語教育の現場の繋がりを促進する有効なツールとして「JF日本語教育スタンダード」の利用を広めました。

また、国内外において「JF日本語教育スタンダード」を紹介するセミナーやワークショップ等を11件実施しました。

○日本語教育情報交流

後述のふたつの日本語教育関係資料を刊行し、配布およびウエ

ブサイトで公開したほか、図書館に寄贈しました。

●「日本語教育通信」(ウェブサイト)

●『国際交流基金日本語教育紀要』8号(冊子・ウェブサイト)

6—関西国際センターにおける研修事業

①専門日本語研修・日本語学習者訪日研修など

関西国際センターでは、海外における日本語学習者支援の観点から、他機関では十分に教育を行うことが難しい専門性の高い日本語研修、学習奨励研修と、地方自治体等関係機関との連携強化のための事業を実施しました。

○専門日本語研修:[外交官]28カ国29名/[公務員]8カ国9名/[文化学術専門家]22カ国53名

○日本語学習者訪日研修:[大学生]29カ国69名/[各国成績優秀者]62カ国65名/[高校生]11カ国30名/[李秀賢氏記念韓国青少年招へい事業]30名/[米国JET記念高校生招へい]32名

○大学連携大学生訪日研修:25カ国80名

○大阪府クィーンズランド州日本語教師研修:5名

○大阪府JET来日時研修:4カ国17名

○タイ日本語教師会(JTAT)教師研修:32名

②21世紀東アジア青少年大交流計画(JENESYS)受託事業

○東アジア日本語移動講座:7カ国38名

○東アジア日本語履修大学生:[夏季]8カ国34名/[秋季]5カ国24名

○南アジア日本語履修大学生:7カ国39名

③その他の受託事業

○香港中文大学大学生訪日研修:8名

○インドネシア人大学生日本語研修:2名

○キャノンベトナム訪日研修:1名

④関西国際センター図書館

日本の文化・社会を紹介する資料を中心に図書・視聴覚資料49,716点、雑誌等266誌を所蔵し、情報・資料の提供を行いました(利用者数:16,320人、貸出点数:9,273点)。

7—経済連携協定(EPA)に基づく

看護師・介護福祉士候補者の日本語教育

経済連携協定に基づくインドネシア人・フィリピン人看護師・介護福祉士候補者への日本語予備教育受託事業を実施しました。

○インドネシア:200名/フィリピン:100名

日本研究・知的交流事業概観

1——日本研究機関の支援

各国において日本研究の中核的な役割を担う機関が、その研究基盤を強化し優れた人材を育成できるよう、各機関のニーズに応じて、客員教授派遣、研究・会議助成、教員拡充助成、図書拡充などを組み合わせた包括的な支援を実施しました（P.29参照）。

①日本研究機関支援 67機関

支援……67機関（32カ国・1地域）

東アジア…ソウル大学／高麗大学／南開大学／復旦大学など
東南アジア…インドネシア大学／チュラロンコン大学／タマサート大学／フィリピン大学／マラヤ大学／ハノイ国家大学など
南アジア…ジャワハルラル・ネルー大学／デリー大学
大洋州…オーストラリア国立大学／オークランド大学
北米…カリフォルニア州立大学（サンタバーバラ校）／デューク大学／コロムビア大学／ファーマン大学／ウォータールー大学など
中南米…エル・コレヒオ・デ・メヒコ／サンパウロ大学など
西欧…ヴェネツィア大学／ロンドン大学東洋アフリカ研究学院／バルセロナ自治大学／ボン大学／パリ国立政治学財団など
東欧…ザグレブ大学／ブカレスト大学／極東国立総合大学など
中東…テヘラン大学／カイロ大学／アインシャムス大学

②北京日本学術研究センター事業

北京外国語大学に設置された北京日本学術研究センターに対して、日本人教授など、のべ14名を派遣して講座の運営を行ったほか、大学院生22名の日本への招へい、研究・出版に対し支援を行いました。また北京大学に設置された現代日本研究センターに日本人教授のべ12名を派遣したほか、大学院生・講座関係者22名を日本に招へいしました。

2——日本研究フェロースhip

長期……学者・研究者138名（37カ国）・博士論文執筆者134名（34カ国）

短期……研究者54名（29カ国）

国際交流基金は、設立当初より日本に関わる研究を行う学者・研究者を日本に招へいするフェロースhipプログラムを実施しており、これまでに4,700名以上が海外から日本を訪れて研究や調査を行い、日本の専門家との人的ネットワークを築いています。2011年度は合計326名のフェロースhipが日本での調査研究活動を行いました（P.29参照）。

3——日本研究ネットワーク強化

主催……8件

助成……25件

国および専門分野を越えた日本研究者の横断的な協力・連携ネットワーク形成のため、第2回東アジア日本研究フォーラムや震災

復興をテーマにした日本研究セミナーなどを開催しました。

また、国際的な日本研究学会に対する支援や、韓国、米国における日本研究者・日本研究機関に関する調査を実施しました（P.28参照）。

4——知的交流会議などの開催・支援

国際会議・知的対話事業の企画・実施……26件

会議開催経費・参加者旅費の支援……198件（人材育成成功含む）

世界・地域の共通課題に取り組むため、以下をはじめとする知的交流事業の開催と支援を行いました。

①中国知識人グループ招へい

中国の知識人と、日本側関係者との未来的な知的ネットワークの構築を目的とする事業。これまで日本との接触が多くなかったが対日理解・関心を促すことに長期的な効果が期待される国際問題等の専門家を、グループや個人で招へいし、日本人研究者との意見交換・各種機関訪問・地方都市訪問などを実施しました。

②東南アジア若手イスラム知識人グループ招へい

インドネシア、マレーシア、フィリピン、タイ、シンガポールで次世代を担うイスラム知識人と目される若手研究者9名が、日本を例にとった社会の近代化とイスラムの調和をテーマに、日本の研究者による講義や意見交換などを通して日本理解を深めました。

③日印文明対話公開シンポジウム

日本とインドの知的交流を一層強める「日印文明対話」事業の端緒として、「アジア・ルネサンス—渋沢栄一、J・N・タタ、岡倉天心、タゴールに学ぶ」をテーマに、2011年12月にシンポジウムを東京で開催しました（共催：国際文化会館）。

④講演会「復興のためにアートは何かできるか」

東日本大震災の被災者の仮設住宅で実施したアートプロジェクト（P.30参照）に参加した日系ブラジル人アーティストのチチ・フリーク氏の講演会を2012年3月にブラジルのサンパウロ及びクリチバで開催しました。被災地の現状と復興の様子、アートによる社会貢献などについて活発な議論が交わされました。

⑤日独シンポジウム「東日本大震災と新旧メディアの役割」

2011年7月にベルリンにて、日独のジャーナリストおよび研究者が東日本大震災および福島原発事故に関する報道の国際比較や災害時のメディアの役割について論じるシンポジウムを開催しました（共催：ベルリン日独センター）。

⑥日本・韓国・欧州多文化共生都市国際シンポジウム

文化的多様性を街の活力の源泉とする「インターカルチュラル・シティ」の取り組みが進む欧州と文化共生に積極的な日本と韓国の地方自治体から、首長および実務家が集まり、2012年1月に東京でシンポジウムを開催しました（共催：欧州評議会）。

5——知的リーダー交流

招へい……54名(32カ国)

日本との知的対話のネットワーク構築を目的として、海外の研究者や専門家に訪日調査・研究などの機会を提供しました。

①アジア・リーダーシップ・フェロースHIPプログラム(7カ国7名)

アジア各国で活躍する知識人が東京で2カ月間をともに過ごす対話を重ねる事業(共催:国際文化会館)。2011年度は、「対話するアジア:思いやりある社会の創造をめざして」を総合テーマに7名が参加。被災地訪問なども通じ、災害に際して知識人が果たすべき役割や国や地域を越えた連帯について議論を重ねました。

②中東次世代リーダー招へい(3カ国16名)

民主化が進むエジプト、ヨルダン、チュニジアの若手リーダーを日本に招へいし、被災地で復興に取り組む日本人関係者との意見交換を通じて、市民主導の社会の構築に際してのリーダーシップのあり方を考える機会を提供しました。(P.30参照)

③知的交流フェロースHIP

フェロースHIP……31名(23カ国)

日本との知的対話のネットワーク構築を目的として、現代社会に共通する課題を研究する東欧、中東及びアフリカ地域の人文・社会科学の若手研究者に、訪日調査、研究の機会を提供しました。

6——21世紀東アジア青少年 大交流計画(JENESYS) 受託事業

ASEANを中心とする東アジア地域の若手リーダー層を招へいし、東アジアにおける重要な共通課題について、日本の実例を共有しての活発な議論が行なわれました。

①「エネルギー安全保障:東アジアにおける地域協力の進展」

19名(13カ国)

②「防災と人々のつながり:災害に強い社会の構築を目指して」

25名(15カ国)

③「エネルギー安全保障:持続可能なエネルギーシステムの構築を目指して」

23名(13カ国)
また、日本研究(東アジア研究を含む)を専攻する大学院生20名(10カ国)を招へいし、日本についての講義及び視察の機会を提供しました。

7——日米センター

「日米両国の共同による世界への貢献」および「日米関係の緊密化」を目的に、以下のような活動を行っています。

主催・共催……6件

①安倍フェロースHIP

日米の研究者など12名にフェロースHIPを供与し、現代の地球

規模の政策課題で緊要の取り組みが必要とされる問題に関する調査研究を促進し、日米の新しいパートナーシップとネットワーク形成を推進しました。またジャーナリストによる、掘り下げた調査研究を通じて、日本および米国の相互理解に貢献する報道を支援する安倍ジャーナリスト・フェロースHIPに4名を採用しました。

②日米草の根交流コーディネーター派遣(JOI)プログラム

日本との交流機会が比較的少ない南部や中西部地域における草の根レベルの交流や日本理解の促進を目指し、新たに6名のコーディネーターを派遣しました。そのほか「日系アメリカ人リーダーシップ・シンポジウム」「米国アジア研究専門家招へい事業」(参照P.31)などを実施しました。

助成

①助成プログラム

プログラム……121件

日米共通のあるいは地球規模の課題について実施される日米共同プロジェクトを募集し、16件に対して助成を行いました。

また、東日本大震災からの復興と防災をテーマとする取り組みへの支援を決定し、震災の犠牲となった米国人外国語指導助手(JET)記念事業や震災デジタル・アーカイブ事業など12件を助成しました。

さらに、米国における小規模助成を36件(知的交流助成10件、草の根交流4件、日本理解促進22件)実施。全体として、「日米アジアジャーナリスト会議」(参照P.31)などの企画参画型助成や昨年度からの継続案件も含め合計121件を助成しました。

②日米同盟深化のための日米交流強化イニシアティブ

2010年11月のオバマ大統領訪日の際に発表された「日米同盟深化のための日米交流強化イニシアティブ」の一環として、上述の「米国アジア研究専門家招へい事業」(主催)の他、米国の有力シンクタンクとの関係強化(助成)、米国の大学生の訪日研修を支援する助成事業(10件)を実施しました。

8——日米文化教育交流会議(カルコン)

日米文化教育交流会議(The United States - Japan Conference on Cultural and Educational Interchange:略称CULCON:カルコン/米側事務局は日米友好基金:Japan-US Friendship Commission)は、2011年5月に、ワシントンD.C.において、ジョンズ・ホプキンス大学高等国際問題研究大学院(SAIS)との共催により、シンポジウム「日米パートナーシップの深化:変貌する世界に於ける教育と文化の絆」を開催しました。

民間からの資金協力

国際交流基金は、企業、団体、個人など広く民間からの資金協力を仰いで国際文化交流事業を実施しています。ここでは2011年度時点での国際交流基金への寄附制度をご紹介しますとともに、同制度を通じて資金のご協力をいただいた法人、個人の方々、およびそのご協力により支援を受けた事業を紹介します。

1. 寄附の種類

[1] 一般寄附金

当基金の国際文化交流事業の経費の財源として活用します。

ア. 一般寄附金制度

法人、個人から、寄附の時期、金額とも任意で受け入れる寄附金です。2011年度に寄附をした法人および個人、ならびに寄附による実施事業例は次頁の「事業費への寄附者」「民間出えん金寄附者」「民間出えん金による支援事業」を参照してください。

(ア) 事業費への寄附

寄附金を受け入れた年度の事業経費として活用します。寄附者の希望により、実施事業の中から、寄附金を充当する事業を指定することも可能です。

(イ) 基金(ファンド)への寄附(=民間出えん金)

寄附金を基金(ファンド)に組み入れ、その運用利息を毎年度の事業費として恒久的に活用します。

イ. 会員制度

年会費として企業、団体より一定額の寄附金を受け入れ、受け入れた年度の事業経費として活用します。1口10万円(年額)で、普通会员(1~4口)と特別会員(5口以上)があります。会員には、催しのご案内、「国際交流基金年報」の送付等、各種特典を提供しています。2011年度の会員は次頁の「賛助会会員」を参照してください。

[2] 特定寄附金

国内の企業や個人が国内外の国際文化交流事業を支援する場合には、特定公益増進法人である国際交流基金が、その支援資金を寄附金として受け入れ、対象事業への助成金として交付する制度です。本制度を利用することで、企業や個人は寄附金に対する税制上の優遇措置を受けることができます。

対象となる事業は、国際文化交流を目的とする人物交流、海外における日本研究や日本語教育、国際文化交流を目的とする公演・展示・セミナー等の催し等です。また、特定寄附金の受け入れは、外部専門家で構成される審査委員会への諮問を経て決定します。2011年度の支援事業は次頁の「特定寄附金による支援事業」を参照してください。

2. 税制上の優遇措置

当基金は法人税法施行令第77条および所得税法施行令第217条により「公益の増進に著しく寄与する法人」(特定公益増進法人)に指定されており、上述の寄附は税制上の優遇措置の対象となります。

(1) 法人の場合

特定公益増進法人に対する寄附金の合計額、または、特別損金算入限度額のいずれか少ない金額が損金に算入されます。

(注1) 特定公益増進法人に対する寄附金のうち、損金に算入されなかった金額(特別損金算入限度額を超える部分の金額)は、通常の寄附金の額に含めます。

寄附金の損金算入限度額は次の算式によります(ここには、2012年4月1日以降に開始する事業年度について適用される算式を記載しておりますので、ご注意ください)。

● 通常の寄附金

(資本金等の額×当期の月数/12×0.25%+所得の金額×2.5%)×1/4

● 特定公益増進法人に対する寄附金の損金算入限度額(特別損金算入限度額)

(資本金等の額×当期の月数/12×0.375%+所得の金額×6.25%)×1/2

(2) 個人の場合

所得の40%を上限として、寄附の合計金額から2千円を差し引いた金額が所得控除の対象となります。相続財産からの寄附についても、税制上の優遇措置があります。

3. 2011年度寄附金額実績

	件数	金額
一般寄附金	47件	15,380,000円
賛助会	40件	7,750,000円
事業費への寄附	4件	7,600,000円
民間出えん金	3件	30,000円
特定寄附金	37件	258,692,568円(注2)

(注2) うち、225,952,568円および2010年度より繰越した特定寄附金23,004,000円を、21事業(次頁「特定寄附金による支援事業」参照)に対する助成金として交付しました。残額(32,740,000円)は、4件の事業に対する助成金として2012年度に交付予定です。

(注3) なお、1972年の国際交流基金設立以来2011年度末までの累計で、一般寄附金として24億7,632万円、特定寄附金として659億6,812万円を受け入れています。

2011年度の寄附者や寄附金による事業一覧

賛助会会員 (2011年度未現在、50音順、敬称略)

[1] 特別会員

松竹(株) / 電源開発(株) / (株)みずほ銀行 / (株)三菱東京UFJ銀行

[2] 普通会員

(財)あすか青年育成国際財団 / (財)池坊華道会 / 出光興産(株) / (株)印象社 / ウシオ電機(株) / SMBC日興証券(株) / (財)NHKインターナショナル
カトーレック(株) / (株)関西アーバン銀行 / (株)講談社 / (財)講道館 / (株)国際サービス・エージェンシー / (学)駒澤大学 / (財)今日庵 / (株)桜映画社
(株)資生堂 / (一財)ジャパンエコー / (一財)少林寺拳法連盟 / スターレーン航空サービス(株) / (財)全日本剣道連盟 / (株)第一成和事務所
ダイキン工業(株) / 大和証券キャピタル・マーケット(株) / (株)電通 / 東京ビジネスサービス(株) / (一社)日本映画製作者連盟 / (株)日本折紙協会
(財)日本国際協力センター / (株)日立製作所 / 富士ゼロックス(株) / (株)凡人社 / みずほ証券(株) / (株)三井住友銀行 / 三菱UFJモルガン・スタンレー証券(株)
(株)明治書院ホールディングス / 森ビル(株)

事業費への寄附者 (敬称略、寄附受領順)

「第54回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展」事業に対する寄附 伊藤澄子 / 個人1名

「日本ハンガリー協力フォーラム」日本語教育促進事業に対する寄附 住友化学(株)

「日韓学生パッケージデザイン交流プロジェクト」事業に対する寄附 (株)ロッセ

民間出えん金寄附者 (敬称略、寄附受領順)

土肥松男 / 三嘴博昭 / 個人1名

民間出えん金による支援事業 (寄附者の意向に基づき特別事業を設定し、事業名に寄附者の名を付する「冠寄附」の例)

冠寄附事業名	寄附者および事業内容
内田奨学金フェローシップ	寄附者は内田元亨氏(故人)。米国・欧州等の若手音楽家等を日本に招へいし、日本の音楽関係者等との交流や、共演、共同制作を行う機会を提供。2011年度は米国から1名のフェローを招へい
高砂熱学工業・日本研究フェローシップ	寄附者は高砂熱学工業株式会社。東南アジアの日本研究振興のために、同地域の若手日本研究者に訪日研究の機会を提供。2011年度はベトナムから1名のフェローを招へい
「渡辺健基金」図書寄贈	寄附者は渡辺行信氏(米国研修中に事故で逝去された元外務省職員渡辺健氏のご遺族)。中国 天津 社会科学院に日本研究のための図書を寄贈。2011年度は230冊の図書を寄贈

特定寄附金による支援事業 ()内は事業実施国

日米交流財団フェローシッププログラム(米国)	国際犯罪学会第16回世界大会(日本)
日米研究インスティテュート(米国)	文化経済学会(日本)20周年記念事業(日本)
コロンビア・ロー・スクール日米交流事業(米国)	バルカン室内管弦楽団ウィーン公演(オーストリア)
「故石川吉右衛門教授記念・比較日本法基金」の設立(米国)	とやま世界こども舞台芸術祭2012(日本)
コロンビア・ロー・スクール日本法研究奨学金(米国)	日韓交流おまつり2011(日本)
デューク・ロー・スクール日本法・文化プログラム(米国)	ミュージック・フロム・ジャパン2012年音楽祭(米国)
エルエスエイチアジア奨学金(日本)	四天王寺ワッソ(日本)
ドイツ語圏大学日本語教育研究会紀要出版(ドイツ)	日独交流150周年日独友好賞(ドイツ)
ジャパン・リターン・プログラム2011年“希望と平和”日本語サミット(日本)	日英博覧会日本庭園修復事業(英国)
ドイツ社団法人日本語普及センター日本語教育事業(ドイツ)	アジア女子大学(バングラデシュ)
新国際版「マダムバタフライ」世界初演(イタリア)	

財務諸表

決算報告書、貸借対照表、損益計算書、損失の処理に関する書類

決算報告書 [2011年4月1日～2012年3月31日]

[単位：円]

区分		予算額	決算額
収入	運営費交付金	11,470,757,000	11,470,757,000
	運用収入	1,251,159,000	1,112,369,511
	寄附金収入	795,925,000	274,042,568
	受託収入	447,704,000	1,956,761,935
	その他収入	875,825,000	857,078,992
計		14,841,370,000	15,671,010,006

支出	業務経費	15,991,510,000	14,992,823,431
	文化芸術交流事業費	2,631,894,000	2,644,223,536
	海外日本語事業費	5,073,184,000	4,785,070,999
	海外日本研究・知的交流事業費	2,705,672,000	2,754,267,930
	調査研究・情報提供等事業費	952,112,000	724,206,240
	東日本大震災復旧・復興文化交流事業費	238,590,000	329,977,356
	その他事業費	4,390,058,000	3,755,077,370
	一般管理費	2,358,602,000	2,304,107,111
	人件費	1,584,773,000	1,531,343,071
	物件費	773,829,000	772,764,040
計		18,350,112,000	17,296,930,542

(注) 決算報告書においては国際交流基金の国内勤務役職員人件費は一括して一般管理費に計上しているが、損益計算書においては、国内勤務役職員の勤務実態に合わせて各業務分野毎の費用として計上している

貸借対照表 [2012年3月31日]

[単位：円]

資産の部				
I	流動資産	現金及び預金	6,683,021,551	
		有価証券	6,299,877,967	
		前払費用	54,634,131	
		未収収益	215,080,327	
		未収金	311,779,023	
		その他の流動資産	8,345,808	
		流動資産合計		13,572,738,807
II	固定資産	1 有形固定資産		
		建物	13,172,050,615	
		減価償却累計額	△ 4,134,265,718	9,037,784,897
		構築物	318,519,361	
		減価償却累計額	△ 190,042,452	128,476,909
		機械装置	13,222,262	
		減価償却累計額	△ 7,569,477	5,652,785
		車両運搬具	132,126,496	
		減価償却累計額	△ 91,487,278	40,639,218
		工具器具備品	1,211,670,301	
		減価償却累計額	△ 842,056,699	369,613,602
		美術品		473,513,676
		土地		186,375,000
		建設仮勘定		23,239,700
		有形固定資産合計		10,265,295,787
		2 無形固定資産		
		借地権		3,959,000
		ソフトウェア		108,953,565
		電話加入権		441,000
		無形固定資産合計		113,353,565
		3 投資その他の資産		
		投資有価証券		50,825,148,091
		長期預金		1,700,000,000
		敷金保証金		795,432,813
		投資その他の資産合計		53,320,580,904
		固定資産合計		63,699,230,256
資産合計				77,271,969,063
負債の部				
I	流動負債	預り寄附金	39,863,535	
		未払金	1,275,193,293	
		未払費用	1,536,503	
		前受金	2,115,447,615	
		預り金	4,962,887	
		リース債務	10,100,005	
		為替予約	3,814,529	
		引当金		
		賞与引当金	13,478,080	13,478,080
		流動負債合計		3,464,396,447
II	固定負債	資産見返負債		
		資産見返運営費交付金	1,284,321,032	
		資産見返寄附金	1,717,766	
		建設仮勘定見返運営費交付金	23,239,700	1,309,278,498
		長期リース債務		5,902,388
		資産除去債務		53,924,340
		固定負債合計		1,369,105,226
負債合計				4,833,501,673
純資産の部				
I	資本金	政府出資金	77,969,741,003	
		資本金合計		77,969,741,003
II	資本剰余金	資本剰余金	292,914,708	
		損益外減価償却累計額 (△)	△ 4,533,767,575	
		損益外減損損失累計額 (△)	△ 126,000	
		損益外利息費用累計額 (△)	△ 13,865,292	
		民間出えん金	906,952,787	
		資本剰余金合計		△ 3,347,891,372
III	繰越欠損金	当期末処理損失	△ 2,179,567,712	
		(うち当期総利益)	256,103,499	
		繰越欠損金合計		△ 2,179,567,712
IV	評価・換算差額等	繰延ヘッジ損益	△ 3,814,529	
		評価・換算差額合計		△ 3,814,529
純資産合計				72,438,467,390
負債純資産合計				77,271,969,063

損益計算書 [2011年4月1日～2012年3月31日]

[単位：円]

経常費用	文化芸術交流事業費		2,858,035,672	
	日本語教育事業費		4,981,044,373	
	日本研究・知的交流事業費		2,961,250,666	
	調査研究・情報提供等事業費		801,023,016	
	東日本大震災復旧・復興文化交流事業費		329,977,356	
	その他事業費	在外事業費	3,574,025,559	
		文化交流施設等協力事業費	255,663,620	3,829,689,179
	一般管理費			1,269,282,859
	財務費用			554,477
	雑損			117,808,800
経常費用合計				17,148,666,398
経常収益	運営費交付金収益		14,408,398,729	
	運用収益		1,126,106,223	
	受託収入		609,380,390	
	寄附金収益	寄附金収益	19,286,619	
		特定寄附金収益	248,956,568	268,243,187
	資産見返戻入	資産見返運営費交付金戻入	165,261,604	
		資産見返寄附金戻入	1,289,256	166,550,860
	財務収益	受取利息	1,186,016	1,186,016
	雑益	日本語能力試験受験料等収益	585,276,336	
		その他の雑益	237,407,995	822,684,331
経常収益合計				17,402,549,736
経常利益				253,883,338
臨時損失	固定資産売却損		114,631	
	固定資産除却損		3,506,321	3,620,952
臨時利益	資産見返運営費交付金戻入		4,179,414	
	固定資産売却益		1,661,699	5,841,113
当期純利益				256,103,499
当期総利益				256,103,499

損失の処理に関する書類 [2012年8月23日]

[単位：円]

I	当期末処理損失		2,179,567,712
	当期総利益	256,103,499	
	前期繰越欠損金	2,435,671,211	
II	次期繰越欠損金		2,179,567,712

諮問委員会等 [2011年度]

以下の方々に委員として、ご協力いただいています。(50音順・敬称略、肩書きは2011年度のもの)

国際交流基金 評価に関する有識者委員会

片山 正夫

財団法人セゾン文化財団 常務理事

古城 佳子

東京大学大学院総合文化研究科 教授

曾田 修司

跡見学園女子大学マネジメント学部 教授

高階 秀爾

財団法人大原美術館 館長

天日 隆彦

読売新聞社 論説委員

西原 鈴子

前・東京女子大学現代文化学部 教授

堀江 正弘

政策研究大学院大学 副学長

森元 峯夫

株式会社エスイー 代表取締役社長

日本研究米国諮問委員会 (American Advisory Committee) 2011—2012

学者・研究者

フェローシップ小委員会 (RF 小委員会)

Research Fellowship
Screening Subcommittee

Wesley Jacobsen

ハーバード大学 言語学

Susan Long

ジョン・キャロル大学 人類学

Kikuko Yamashita

ブラウン大学 日本語学/言語学

Anne Walthall

カリフォルニア大学アーバイン校 歴史学

Gennifer Weisenfeld

デューク大学 美術史

博士論文執筆者

フェローシップ小委員会 (DF 小委員会)

Doctoral Fellowship
Screening Subcommittee

E.Taylor Atkins

北イリノイ大学 歴史学

Rebecca Copeland

ワシントン大学 (セントルイス) 文学

Sabine Frühstück

カリフォルニア大学サンタバーバラ校 カルチュラルスタディー

Leonard Schoppa

バージニア大学 政治学

Michael Smitka

ワシントンアンドリー大学 経済学

機関助成小委員会

(IPS 小委員会)

Institutional Project Support
Screening Subcommittee

Daniel Botsman

イエール大学 歴史学

Jennifer Robertson

ミシガン大学 人類学

Richard Samuels

マサチューセッツ工科大学 政治学

Ann Sherif

オーバーリン大学 文学

Veronica Taylor

ワシントン大学 法学

パリ日本文化会館運営審議会

フランス側委員

Louis Schweitzer

ルノー社名誉会長

Paul Andreu

建築家

Jean-Louis Beffa

サンゴバン社会長

André Larquié

パリ・ベルシー総合スポーツセンター理事長

Jean Maheu

会計検査院顧問

Jacques Rigaud

フランス・メセナ協会元会長

André Ross

元駐日フランス大使

Christian Sautter

パリ市経済・財政・雇用担当助役、元経済財政工業大臣

Valérie Terranova

ジャック・シラク財団事務局長

Jean-Robert Pitte

パリ第4 (ソルボンヌ) 大学元学長

日本側委員

福原 義春

株式会社資生堂名誉会長

伊東 順二

美術評論家、富山大学芸術文化学部教授

荻野 アンナ

作家、慶應義塾大学文学部教授

酒井 忠康

世田谷美術館館長

佐々木 元

日本電気株式会社特別顧問

西垣 通

東京大学大学院情報学環教授

芳賀 徹

東京大学名誉教授

早間 玲子

建築家

国際交流基金は21カ国に22の海外拠点を設けています。これらの拠点を足がかりに、世界各国の在外公館、文化交流機関や日本語教育機関等と緊密に連携をとりながら、グローバルに活動を展開しています。

① イタリア

ローマ日本文化会館

Istituto Giapponese di Cultura
 (The Japan Cultural Institute in Rome)
 Via Antonio Gramsci 74, 00197 Roma, Italy
 TEL : 39-06-322-4754/94
 FAX : 39-06-322-2165

② ドイツ

ケルン日本文化会館

Japanisches Kulturinstitut
 (The Japan Cultural Institute in Cologne)
 Universitätsstraße 98, 50674 Köln, Germany
 TEL : 49-221-9405580
 FAX : 49-221-9405589

③ フランス

パリ日本文化会館

Maison de la culture du Japon à Paris
 (The Japan Cultural Institute in Paris)
 101 bis, quai Branly,
 75740 Paris Cedex 15, France
 TEL : 33-1-44-37-95-00
 FAX : 33-1-44-37-95-15

④ 英国

ロンドン日本文化センター

The Japan Foundation, London
 Russell Square House 6F, 10-12 Russell
 Square, London, WC1B 5EH, United Kingdom
 TEL : 44-20-7436-6695
 FAX : 44-20-7323-4888

⑤ スペイン

マドリッド日本文化センター

The Japan Foundation, Madrid
 Calle Almagro 5, 4a planta, 28010 Madrid, Spain
 TEL : 34-91-310-1538
 FAX : 34-91-308-7314

⑥ ハンガリー

ブダペスト日本文化センター

The Japan Foundation, Budapest
 Oktogon Ház 2F, 1062 Budapest,
 Aradi u.8-10, Hungary
 TEL : 36-1-214-0775/6
 FAX : 36-1-214-0778

⑦ ロシア

全ロシア国立外国文献図書館「国際交流基金」文化事業部 (モスクワ日本文化センター)

The Japanese Culture Department
 "Japan Foundation" of the All-Russia State
 Library for Foreign Literature
 4th Floor, Nikoloyamskaya Street, 1, Moscow,
 Russian Federation, 109189
 TEL : 7-495-626-5583/85
 FAX : 7-495-626-5568

⑧ エジプト

カイロ日本文化センター

The Japan Foundation, Cairo
 5th Floor, Cairo Center Building,
 106 Kasr Al-Aini Street,
 Garden City, Cairo, Arab Republic of Egypt
 TEL : 20-2-2794-9431/9719
 FAX : 20-2-2794-9085

⑨ 韓国

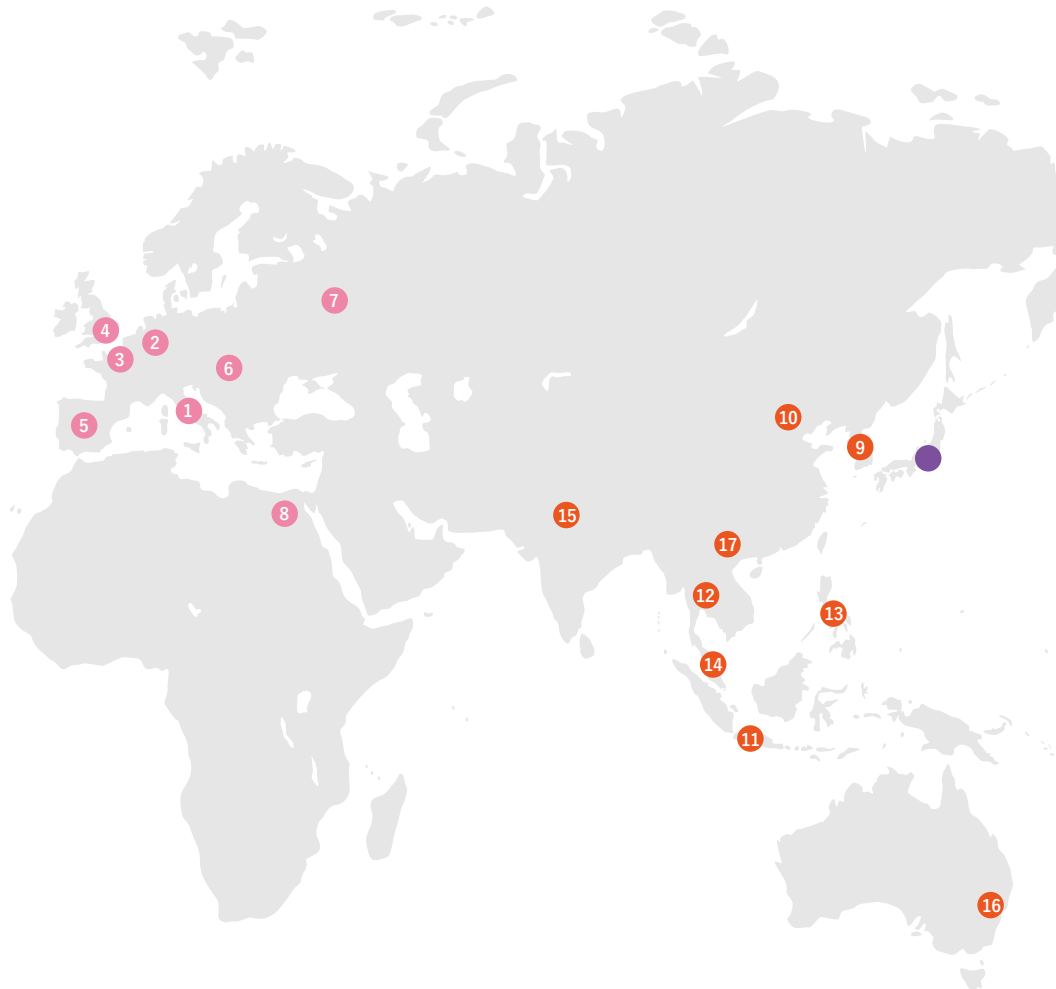
ソウル日本文化センター

The Japan Foundation, Seoul
 Vertigo Tower. 2&3F, Yonseiro 8-1,
 Seodaemun-gu, Seoul 120-833, Korea
 TEL : 82-2-397-2820
 FAX : 82-2-397-2830

⑩ 中国

北京日本文化センター

The Japan Foundation, Beijing
 #301, 3F SK Tower, Beijing,
 No.6 Jia Jianguomenwai Avenue,
 Chaoyang District, Beijing, 100022, China
 TEL : 86-10-8567-9511
 FAX : 86-10-8567-9075



11 インドネシア

ジャカルタ日本文化センター

The Japan Foundation, Jakarta
Summitas I, 2-3F, Jalan Jenderal Sudirman,
Kav. 61-62 Jakarta Selatan 12190, Indonesia
TEL : 62-21-520-1266
FAX : 62-21-525-1750

12 タイ

バンコク日本文化センター

The Japan Foundation, Bangkok
Serm Mit Tower, 10F,
159 Sukhumvit 21 (Asoke Road),
Bangkok 10110, Thailand
TEL : 66-2-260-8560 ~ 64
FAX : 66-2-260-8565

13 フィリピン

マニラ日本文化センター

The Japan Foundation, Manila
23rd Floor, Pacific Star Bldg.,
Sen. Gil J. Puyat Ave. Ext., cor.
Makati Ave., Makati, Metro
Manila 1226, The Philippines
TEL : 63-2-811-6155 ~ 8
FAX : 63-2-811-6153

14 マレーシア

クアラルンプール日本文化センター

The Japan Foundation, Kuala Lumpur
18th Floor, Northpoint Block B,
Mid-Valley City, No.1, Medan Syed Putra,
59200, Kuala Lumpur, Malaysia
TEL : 60-3-2284-6228
FAX : 60-3-2287-5859

15 インド

ニューデリー日本文化センター

The Japan Foundation, New Delhi
5-A, Ring Road, Lajpat Nagar-IV,
New Delhi 110024, India
TEL : 91-11-2644-2967/68
FAX : 91-11-2644-2969

16 オーストラリア

シドニー日本文化センター

The Japan Foundation, Sydney
Shop 23, Level 1, Chifley Plaza,
2 Chifley Square,
Sydney NSW 2000, Australia
TEL : 61-2-8239-0055
FAX : 61-2-9222-2168

17 ベトナム

ベトナム日本文化交流センター

The Japan Foundation Center for
Cultural Exchange in Vietnam
No.27 Quang Trung Street,
Hoan Kiem District, Hanoi, Vietnam
TEL : 84-43-944-7419/20
FAX : 84-43-944-7418

18 カナダ

トロント日本文化センター

The Japan Foundation, Toronto
131 Bloor Street West, Suite 213,
Toronto, Ontario, M5S 1R1, Canada
Tel: 1-416-966-1600
Fax: 1-416-966-9773

米国

19 ニューヨーク日本文化センター

The Japan Foundation, New York
152 West 57th Street, 17F
New York, NY 10019, U.S.A.
TEL : 1-212-489-0299
FAX : 1-212-489-0409

ニューヨーク日米センター

The Japan Foundation
Center for Global Partnership NY
152 West 57th Street, 17F
New York, NY 10019, U.S.A.
TEL : 1-212-489-1255
FAX : 1-212-489-1344

20 ロサンゼルス日本文化センター

The Japan Foundation, Los Angeles
5700 Wilshire Boulevard, Suite 100
Los Angeles, CA 90036, U.S.A.
TEL : 1-323-761-7510
FAX : 1-323-761-7517

21 メキシコ

メキシコ日本文化センター

The Japan Foundation, Mexico
Av. Ejército Nacional No. 418, 2do Piso,
Col. Chapultepec Morales, CP 11570,
Mexico, D.F., Mexico
TEL : 52-55-5254-8506
FAX : 52-55-5254-8521

22 ブラジル

サンパウロ日本文化センター

The Japan Foundation, Sao Paulo
Avenida Paulista 37, 2° andar Paraiso,
CEP 01311-902, São Paulo, SP, Brasil
TEL : 55-11-3141-0843/0110
FAX : 55-11-3266-3562



国際交流基金

ジャパンファウンデーション

本部

http://www.jpf.go.jp/
〒160-0004

東京都新宿区四谷4-4-1

■情報センター (JFIC)

TEL. 03-5369-6075

FAX. 03-5369-6044

■JFICライブラリー

TEL. 03-5369-6086

FAX. 03-5369-6048

日本語国際センター

http://www.jpf.go.jp/j/urawa/

〒330-0074

埼玉県さいたま市

浦和区北浦和5-6-36

■代表

TEL. 048-834-1180

FAX. 048-834-1170

■図書館

TEL. 048-834-1185

FAX. 048-830-1588

関西国際センター

http://www.jfkj.jp/

〒598-0093

大阪府泉南郡田尻町

りんくうポート北3-14

■代表

TEL. 072-490-2600

FAX. 072-490-2800

京都支部

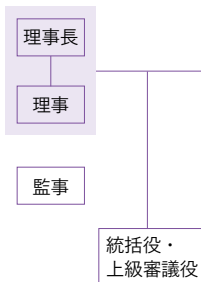
〒606-8436

京都市左京区粟田口鳥居町2番地の1

京都市国際交流会館3階

TEL. 075-762-1136

FAX. 075-762-1137



本部	総務部	総務課 システム管理室 情報公開室 人事課 給与・人事評価室 企画・評価課
	経理部	財務課 財務監理室 会計課
	海外事業戦略部	海外拠点課 パリ日本文化会館業務室 海外事業課
文化事業グループ		
	文化事業部	企画調整チーム 米州チーム アジア・大洋州チーム 欧州・中東・アフリカチーム 情報提供・映像管理チーム
	日中交流センター	
日本語事業グループ		
	日本語教育支援部	企画調整チーム JF講座チーム さくらネットワークチーム 派遣管理チーム 教師研修チーム (日本語国際センター)
	日本語事業運営部	EPA研修チーム 事業化開発チーム (日本語国際センター) 教育事業チーム (関西国際センター) 試験運営チーム (日本語試験センター) 試験制作チーム (日本語試験センター)
	日本研究・知的交流事業グループ	企画調整チーム 米州チーム アジア・大洋州チーム 欧州・中東・アフリカチーム
	日米センター	
	情報センター (JFIC)	
	監査室	

附属機関	日本語国際センター	関西国際センター
------	-----------	----------

支部	京都支部
----	------

海外拠点	<ul style="list-style-type: none"> ■ローマ日本文化会館 ■ケルン日本文化会館 ■パリ日本文化会館 ■ソウル日本文化センター ■北京日本文化センター ■ジャカルタ日本文化センター ■バンコク日本文化センター ■マニラ日本文化センター ■クアラルンプール日本文化センター ■ニューデリー日本文化センター ■シドニー日本文化センター ■トロント日本文化センター ■ニューヨーク日本文化センター ■ロサンゼルス日本文化センター ■メキシコ日本文化センター ■サンパウロ日本文化センター ■ロンドン日本文化センター ■マドリッド日本文化センター ■ブダペスト日本文化センター ■全ロシア国立外国文献図書館 ■「国際交流基金」文化事業部 (モスクワ日本文化センター) ■カイロ日本文化センター ■ベトナム日本文化交流センター
------	---

国際交流基金のウェブサイト

ホームページ、メールマガジン

国際交流基金の事業紹介、イベント告知などの最新情報、公募プログラム申請情報、便利な日本語教材、過去に行った調査報告、海外拠点のウェブサイトへのリンクなど、国際交流基金を利用する方にとって役に立つ、さまざまな情報を国際交流基金ホームページ上で発信しています。

■国際交流基金ホームページ

→ <http://www.jpf.go.jp/>

■メールマガジンへの登録

→ 国際交流基金 HP → メールマガジン

ブログ、Twitter、Facebook

■ブログ「地球を、開けよう。」

→ <http://d.hatena.ne.jp/japanfoundation/>

■Twitter

→ @japanfoundation

■Facebook

→ <https://www.facebook.com/TheJapanfoundation>

ウェブマガジン

■をちこち Magazine

→ <http://www.wochikochi.jp/>

分野別ウェブサイト

■日本のアーティスト・イン・レジデンス「AIR_」

→ <http://www.air-j.info/>

■舞台芸術情報「Performing Arts Network Japan」

→ <http://performingarts.jp/>

■日本の出版物に関する書誌情報誌『Japanese Book News』(英語)

→ 国際交流基金 HP → 刊行物・グッズのご案内 → JF 定期刊行物

■日本語能力試験 (JLPT)

→ <http://www.jlpt.jp/>

■アニメ・マンガの日本語

→ <http://www.anime-manga.jp/>

■みんなの教材サイト

→ <http://minnanokyozaai.jp/>

■日本語でケアナビ

→ <http://nihongodecarenavi.jp/>

■インターネット日本語しけん「すしテスト」

→ <http://momo.jpf.go.jp/sushi/>

■WEB版「エリンが挑戦! にほんごできます。」

→ <https://www.erin.ne.jp/>

表紙、扉に使用している写真について

国際交流基金関西国際センター(大阪府)で撮影した写真です。日本語学習者増加に 대응するため、1997年5月に、国内2カ所目の附属機関として設立され、2012年に15周年を迎えました。

外交官・公務員、研究者、大学院生、図書館司書、博物館・美術館学芸員などの専門職に就く人から高校・大学生まで、延べ7,200名におよぶさまざまな日本語学習者が同センターで日本語を学びました。 撮影：増田智泰



cover

関西国際空港が見える宿泊棟のラウンジに集う研修生

p.9

文化芸術交流

食堂入口を飾る海外のテキスタイル

p.17

海外における日本語教育
母国から研修生が持ち寄った品々

p.25

日本研究・知的交流

図書館書架

p.41

資料

事務・図書館棟からエントランス方向を見る



国際交流基金2011年度年報

2012年10月発行

編著・発行：国際交流基金 情報センター

〒160-0004 東京都新宿区四谷4-4-1

TEL.03-5369-6075 FAX.03-5369-6044

編集：ita&co [長谷川直子]

デザイン：岡本健+ [岡本健・阿部太一]

表紙・中扉写真撮影：増田智泰

印刷：東京印書館



地球環境に配慮した大豆油インキを使用しています

<http://www.jpf.go.jp/>